

41787

教科書文庫

4
810
41-1931
200030
2007

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9  
Fu26  
資料室

國文  
新制第一版  
卷三



濟定檢省部資料室  
用科文漢語國校學中 日十二月十年六和昭

編部輯編房山富

# 文 國

版一第制新



田神房山富京東

資料室

375.9  
Fu26

富山房編輯部

國文

新制第一版

東京富山房神田



山嶽の爽氣

山元春舉筆



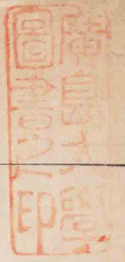
國文 卷三 目次

一 歡の世界へ(詩).....	千家元磨.....一
二 峠の茶屋.....	夏目漱石.....三
三 春の一日.....	幸田露伴.....二〇
盲目的鶯(自修文).....	倉田潮.....二三
四 路傍の草.....	相馬御風.....二〇
五 文章の道.....	島崎藤村.....二九
六 學問する者の第一に心得べきこと.....	貝原益軒.....三六
七 五月の頌(詩).....	川路柳虹.....三九
八 農夫と茶の湯.....	柳澤淇園.....四二
九 篤實.....	橘南谿.....四四

一〇 大なる人物……………山路愛山…五  
 人の美を成せ(自修文)……………芳賀矢一…五  
 二 本多重次……………新井白石…三  
 〇 壇の浦……………五十嵐 力…九  
 三 沈黙の塔……………下田將美…七  
 道は二つにしてまた一つ(自修文)……………幣 原 坦…九  
 四 空の旅その一……………鈴木文史朗…四  
 五 空の旅その二……………鈴木文史朗…一〇  
 六 親の慈愛……………柳澤淇園…一七  
 一 五月雨……………一〇七  
 二 人の長たる者……………一〇  
 三 世渡る業……………一一  
 四 親の慈愛……………一二

七 蛙物語……………山岡元隣…二四  
 八 河 鹿(詩)……………白鳥省吾…二六  
 九 落梅の音……………薄田泣菫…二七  
 一〇 湖のほとり……………田山花袋…二三  
 二 野薔薇……………吉村冬彦…二八  
 金魚賣(自修文)……………島木赤彦…三三  
 三 山嶽の日本……………大町桂月…三四  
 三 大洋の岸邊にて(詩)……………宮崎丈二…三四  
 四 新しい都市その一……………一四一  
 五 新しい都市その二……………一四九  
 若き人よ(自修文)……………中村武羅夫…一六  
 六 秋近く……………吉田絃二郎…一七  
 七 秋風の音……………若山牧水…一七

六 蟲の音	高濱 虚子 一七
元 太秦の牛祭	萩原井泉水 二八
三 談義僧	柴田鳩翁 二六



# 國 文 卷三

(一) 詩人。東京市  
の 人。明治二  
十一年生。

## 一 歡の世界へ

千家元麿<sup>(一)</sup>

日を浴びて靜かにひろがる  
 華やかで清朗な田園の詩趣。  
 今そこには穀物が乏しいが、  
 麥や若葉や葱のわづかな緑が、  
 温く春の匂をたゞへて綺麗にかこはれてゐる。  
 私は氣ものびくと、  
 楽しい歡の世界へ  
 興奮して歩いて行く。  
 私はいつも目的の廣い眺望の土地へ出る。

一 歡の世界へ

一

日ひが朗あかさあをあひろあげる。

雞けいが田家でんけで時ときをつくる。

のびくした平和へいの聲こゑ。

雲うみは静しずかに消きえたり、現あれたり、

遊樂ゆうらくの空そら氣きを華はやがせる。

温ぬい空そらは春はるを想おもはせるに十分じふぶん

だ。

あゝ朗あかあで雄お々おしい麗うかな空そら。

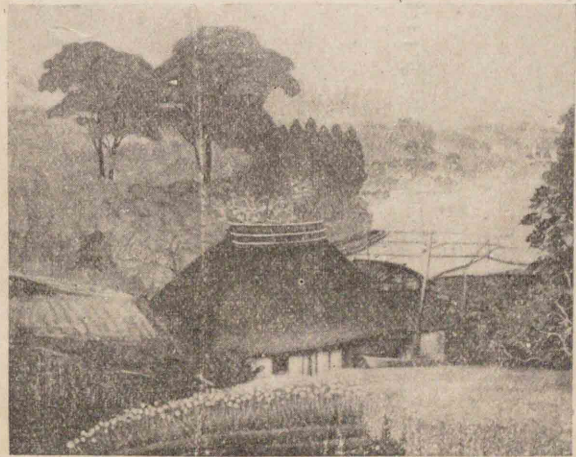
窮きうりなく廣ひろ大だいで淨じゆく、

華はやかで温ぬく瑞すい々ずずしい緑ろくの漲たか

つた高貴こうきな空そら。

萬物ばんぶつを包かんで優やさしい

あの深ふかい空そら。



(筆 廣英島秀) 趣詩の園田

何なにといふ深ふかさだ。

何なにといふ艶えん々ずずしさだ。

## 二 峠の茶屋

夏目漱石

「おい」と聲こゑをかけたが返事こたへがない。

軒下のきから奥おくをのぞくと、煤すすけた障子しょうじが立たてきつてある。向

側わきは見えない。

五六足の草鞋わらじが寂さびしさうに庇ひさしからつるされて屈託くつたく氣きに

ふらりくと揺ゆれる。下に駄菓子だかしの箱はこが三つばかり並ならんで、

そばに五厘ごりん錢ぜにと文久ぶんきう錢ぜにとが散ちばつてゐる。

「おい」とまた聲こゑをかける。土間どまの隅すみに片寄かよせてある白しろの上

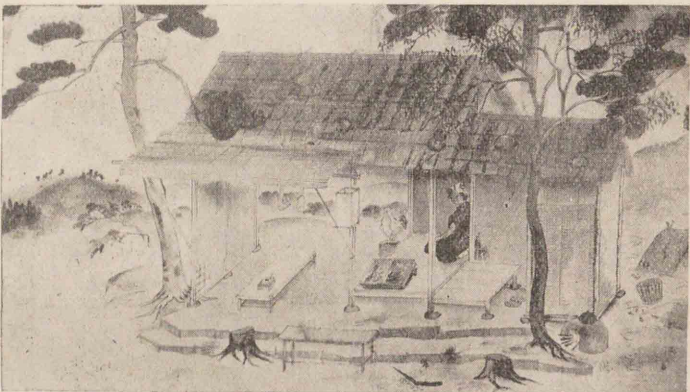
(一) 小説家  
金之助  
市助  
十人  
五  
年  
大東  
正名  
五京  
は

狗イヌ

床シヨウキ几イ

にふくれてゐた雞が、驚いて眼を覺す。くくく、と騒ぎ出す。敷居のそとに土べつつひが、今し方の雨にぬれて、半分程色が變つてゐる上に、眞黒な茶釜がかけてあるが、土の茶釜か銀の茶釜かわからない。幸ひ下は焚きつけてある。返事がないから無斷でずつとはいつて、床几の上に腰をおろした。雞は羽ばたきをして、臼から飛びおりる。今度は疊の上へあがつた。障子が締めてなければ、奥まで駈けぬける氣かも知れない。雄が太い聲で「こけつこつこ」といふと、雌が細い聲で「けけつこつこ」といふ。まるで人を狐か狗の様に考へてゐるらしい。

床几の上には一升柶程な煙草盆が閑靜に控へて、中には



(筆夫剛井白) 屋茶の峠

とぐるを卷いた線香が、日の移るの  
を知らぬ顔で、頗る優長にいぶつて  
ゐる。雨は次第に收る。  
暫くすると、奥の方から足音がし  
て、煤けた障子がさりりとあく。中か  
ら一人の婆さんが出た。  
どうせ誰か出るだらうとは思つ  
てゐた。へつつひに火は燃えてゐる。  
菓子箱の上に錢が散ばつてゐる。線  
香は暢氣にいぶつてゐる。どうせ出  
るには極つてゐる。しかし、自分の店を明放しても苦になら



ないに見える所が、都とは少し違つてゐる。返事がないのに床几に腰をかけて何時までも待つてゐるのも、少し二十世紀とは受取れない。こゝらが誠に面白い。その上出て來た婆さんの顔が氣に入つた。

二三年前寶生<sup>(一)</sup>の舞臺で高砂<sup>(二)</sup>を見た事がある。その時これは美しい活人畫だと思つた。はうきを擔いだ爺さんが橋懸<sup>(三)</sup>を五六歩來て、そろりと後向になつて、婆さんと向ひ合ふ。その向ひ合つた姿勢が今でも眼につく。余の席からは婆さんの顔が殆ど眞向きに見えたから、あゝ美しいと思つた時に、その表情はびしやりと心のカメラ<sup>(四)</sup>に焼きついてしまつた。茶店の婆さんの顔は、この寫眞に血を通はした程似てゐる。

(一)能の流派の一。  
(二)播州(今の兵庫縣加古郡)の高砂の松の下で爺と婆とが肥後國(熊本縣)の阿蘇の神主(成と蘇の本)の物語。  
(三)橋懸は、橋を懸けること。  
(四)camera。

「お婆さん、此所をちよつと借りたよ。」

「はい、これは一向存じませんで。」

「大分降つたね。」

「生憎なお天氣で、さぞお困りで御座んしよ。おゝ、大分おぬれなさつた。今火を焚いて乾かして上げましょ。」

「其所を少しもしつつけてくれゝば、あたりながら乾かすよ。どうも少し休んだら寒くなつた。」

「へえ、只今焚いて上げます。まあお茶を一つ。」

と立上りながら、「しつ、く」と雞を追ひさげる。こゝゝと駈出した夫婦は、焦茶色の畳から駄菓子箱の中を踏附けて、往來へ飛出す。

(刳抜)

「まあ一つ」と婆さんは何時の間にか、くりぬき盆の上に茶碗を載せて出す。茶の色の黒く焦げてゐる底に、一筆がきの梅の花が三輪、無造作に焼附けられてゐる。

「お菓子をと、今度は雞の踏附けた胡麻ねちと微塵棒とを持つてくる。

(禪)

婆さんは袖無の上からたすきをかけて、へつつひの前にうづくまる。余は懷から寫生帖を取出して、婆さんの横顔を寫しながら、話をしかける。

「閑靜でいゝね。」

「へえ、御覽の通りの山里で。」

「鶯は鳴くかね。」

「え、毎日の様に鳴きます。此所らでは夏も鳴きます。」

「聞きたいな。ちつとも聞えないと、尙聞きたい。」

生憎今日は、先刻の雨でどこぞへ逃げました。」

をりから、へつつひの中がぱちくと鳴つて、赤い火がさつと風を起して、一尺餘り吹出す。

「さあ、おあたり。さぞお寒かる。」と言ふ。軒端を見ると、青い煙が突當つて崩れながらに、微な痕をまだ板庇に絡んでゐる。

「あゝ、いゝ心持だ。御蔭で生返つた。」

「いゝ工合に雨も晴れました。そら天狗岩が見え出しました。」

逡巡として曇りがちな春の空をもどかすとばかりに吹

逡巡

拂ふ山嵐の、思ひきりよく通り抜けた前山の一角は、未練もなく晴盡して、老嫗の指さす方に、荒削りの柱の様に聳えるのが天狗岩ださうだ。

—草枕—

やぎら

三 春の一日

幸田露伴

(一)小説家、文學博士。名は成行。慶應三年(一八五七年)江戸に生れた。

天運の和

時知り顔

(考)

春は既に闌シタになつた頃の或日であつた。机のほとりに倦ウんだ身を横たへたら、すぐに睡りさうな氣持がしたので、やをら立出て、縁から庭へとおりた。地は天運テンウンの和ニに乗じて、しつとりと潤ヌひを帯びて踏心地もよく、小草の寸碧も時知り顔トキシリガオでかはゆらしい。夏には憎らしい物であるが、思はずはぐさや、鷹の爪草にも目をとめて、軟かな風の中に優しい心に

なつて立つと、背中がほつかりと暖いので、仰いで空を見ると、透明度の低い薄青い色の一面の中に、眞綿をのして吹飛した様な雲が、動くともなく漂うてゐる。庭には何の花もないが、少しばかりある常緑樹のそれトが、どこことなく生氣を含んで、中にはもはや芽をふいてゐるものもある。やがて和語で淺綠アサナヅキ、漢語で嫩綠ニホヒと言はうよりは、俗に黄金の様なと一口に言つた方がよい色の、その金のさゝべりを飾つて、舊の卯月の日の光に匂はうといふしたくを笑ウましげにしてゐる。梅などの様な落葉樹の芽の早い物は、もう明るい緑をなして、やがての暗い涼しい蔭をつくらうとしてゐる。狭い所を往き還りして、ぶらり／＼歩いてゐると、太陽が慈悲の手

さゝべり

天地一枚  
七、八、九の三枚の叶

煩惱

先を以て、まるで母が我が兒の頭をなぶりでもする様に、その何とも言はれぬ懐かしい温みを、額や頬や項ウデから傳へてくれる。春の神だの、夏の神だの、そんな者は分明に意識には上らないが、綺麗な柔和な或者と、活潑で氣先のよい或者と、二つの立派な者が注いでくれる無私の廣大な愛情が、ひしひしと身に逼ヒツつてくるのを覺えて、言ふに言はれぬ悦が、それに應じ誘はれて、胸の奥だか腹の底だか知らぬ我が身の中心から、にじみ出し溢れ出して、そして手足の先まで行きわたる様な氣がする。何の心もなくひとりでに、かうのあゝのと思ふ煩惱も脱け、かくあらねばならぬ、さうなくてはならぬといふ自縛も解けて、我知らず鳶飛魚躍の境界に立つ

て、故を知らぬ微笑が催され、天地と一枚になつたとも自認するわけではないが、一切の俗念から解放されて、好い心持で、稍暫く逍遙徘徊してゐた。

— 龍姿蛇姿 —

自修文

(一) 法學士

盲目の鶯

倉田

田

潮

聞きほれる  
聞いてうつと  
りする。

隣村の小學校へ通ふ途中に深い森がある。春櫻の花のまだ咲かない頃、私は毎朝その森の同じ場所で鶯の聲を聞いた。初はそのよい聲に聞きほれるだけだったが、しまひには捕つてやらうといふ氣になつて、日曜の朝、鳥もちのついた竹竿を持つて、森に忍びこんだ。

遠くからうかゞふと、鶯は芽のふくれた栗の木の枝を渡りな

盲目の鶯 (自修文)

忍足 足音を立てず  
にそつと歩く  
こと。  
息を殺す 呼吸を抑へて  
静かにする  
ときめかす  
ときめかす  
る。  
(蛇)  
胴ふるひ 全身がふるへ  
わななくこと。

がら鳴いてゐるのだつた。私は忍足で息を殺して其所に近づいて、そつと竿をさし出した。逃げない。二度さし損つたが逃げない。三度目に私は胸をときめかせながら、竹竿を手元に繰つた。鶯がもちにからまつて、叫びながらもがいてゐた。私は竿を放り出して、あぶの様に一直線に、野路を家に走り始めた。手には鶯の微な體温と、おびえた胴ふるひとを感じてゐた。が、私は鶯を憐まないばかりか、反つて鶯が非常に高價な物である事を思つて、走りながら嬉しさに飛上つた。

私の父は村の田舎醫者だつたが、以前から——今でも——鶯を一羽飼つてゐた。その父から聞くと、鶯のよく鳴くのは數十圓の値がするとの事だつた。私は走りながら手に持つた鶯を見た。そしてびつくりして、其所に立止つてしまつた。

鶯は盲目だつた。生れながらの盲目であるらしく、兩眼とも瞳

が白い膜に覆はれてゐた。

二

父は盲目の鶯を見ると、放してやれと言つたが、逃してやる氣にはなれなかつた。籠に入れ、すり餌を與へて、父の鶯と並べて軒につるした。盲目の鶯は餌づかなかつた。餌が見えないのだつた。寂しげに隣の鶯と呼交して鳴いてゐたが、次の日見ると、げつそりと體に弱りが來てゐた。

が、その時、私は不思議な事を見た。父の鶯が口にすり餌を含んで、格子の間から嘴をさし出して、盲目の鶯を呼ぶ。すると、盲目の鶯は幼鳥の様に大きな口をあけて、聲のする方へ進んで行く。餌を與へる、そしてまた與へられる物を受ける氣かも知れない。

私は試に父の鶯の籠に盲目の鶯を入れてやつた。すると、父の鶯が驚くべき事に、盲目の鶯を養ふではないか。それはちやうど、

すり餌 鶯などの小鳥  
を飼ふ餌。小  
魚と野菜とを  
まぜてすつた  
もの。  
餌づく 餌を食ふ様に  
なる。

鶯科  
 燕雀類の科  
 鶯、よしきり、  
 めぼせ等がこ  
 の科に属する。  
 相互扶助の觀  
 念  
 お互に助け合  
 へ。ふ所のかんが

高音を張る  
 高い聲を出す。

親鳥が巢の中の裸雛に餌を與へるのによく似てゐた。私は父を呼んで黙つてそれをさし示した。父も呆れた様に目を圓くして、不可思議に見とれた。

夜になつてから、父は私に向つて、一體に鶯科に属する鳥は弱小で、他の鳥に虐げられるだけ、相互扶助の觀念が發達してゐて、雛などは他科の雛でも、己の子として育てるものだといふ事を話した。多分さういふ性質から、盲目の友を養ふ氣持になつたのだらうと。

私はそれから非常に鶯がかはなくなつた。學校から歸つてくると、籠を両手に下げて、森の空氣を吸はせに行つた。森にはいると鶯は急に勢づいて、朗かに高音を張るのだつた。しかし、或日若草の上に籠を置かうとすると、枯枝に引つかゝつて扉が明いて、盲目の鶯に逃げられてしまつた。父と共に夕方まで森の隅々ま

でも探したが、鶯は姿さへ見せなかつた。

三

土曜日の早引けに、私が森を通りかゝると、父が思ひがけなく新緑の叢の中にたゞずんでゐた。洋服にカバンを抱へてゐる所を見ると、往診の歸りらしい。私を見るとお出で〜をして、黙つて森の奥の方へ歩き出した。私も鉛筆入をかたことと鳴しながら、黙つて後について行つた。

暖春のしんと静かな正午だつた。頭の上には銀色にとけた太陽が煮えてゐた。が、その間に紅や黄色の若芽が幕を張つてゐるので、光は僅かに新緑の小草に波紋を織落すに過ぎなかつた。

「静かに」  
 立止つて、父が眼を險しくして見せた。私は鉛筆入のがた〜するカバンとはずむ息とを抑へて、忍足に歩いた。

眼を險しくする  
 眼を鋭くする  
 はずむ息  
 はげしい呼吸

往診  
 醫者が患者の  
 宅に診察にゆ  
 くこと  
 お出で〜  
 手まねきをする  
 ことをいふ  
 太陽が煮えて  
 太陽が熱く照

「あれを見ろ。さう言ふ様に父が指さしをした。真紅な芽の化粧した大きい古木の梢だつた。針の様な陽の光のまぶしさに眼を細くして眺めると、羽根をふくらませた小鳥がうづくまつてゐる。あの盲目の鶯だつた。

「あれ。」

私は思はず低く叫んだ。父が私の肩を抑へて、静かにとの意味を示した。盲目の鶯が今まで生きてゐた事は、大きな驚だつた。餌が見つかからないから疾うに死んでゐるだらうと、私は考へてゐたのだ。

鶯を見詰めて、叢に身を隠してゐると、あたりが死の様に静まり返つてゐるのに氣がついた。夜の丑三つ時の表に、真晝の魔が時といふ沈黙の不思議な時期があると聞いた事を思ひ出した。鶯も静寂のうちに圓くうづくまつて、動かなかつた。眠つてゐる

丑三つ時  
今の午前二時。

瞬間に  
それと同時に。

のかも知れない。不思議な静けさの中で、私は森の奥の暗がり、白い豆電氣を飾つてゐる鈴蘭の花をぼんやりと見ながら、若草の香に體の染つてしまふのを感じた。

が突然、梢の鶯が「ちゝゝゝ」と叫びながら、幼鳥の様に空に向つて大きく口を開いた。瞬間に、私は盲目の鶯を養ふ者が、近くに來てゐる事を知つた。同時に、それが父の鶯の様な、慈悲に富んだ他の鶯であるだらうと想像した。が、それは鶯ではなかつた。鶯より遙かに小さい、こがらといふ、青と白との羽根に黒い嘴をもつた美しい小鳥だつた。こがらは羽ばたきしながら、口移しに餌を鶯に與へると、體をすりつけて、同じ枝に並び合つて止つた。そして母親の様に鶯の羽根を嘴でとかし始めた。鶯はされるまゝに任せて、安心してじつとしてゐる。紅い芽の中に並び合つた青と灰色との小鳥の翼に、晩春の柔かい銀の光線が流れてゐた。

讚歎  
感心しほめる  
こと。四つの  
眼とは、父と  
子との眼

魅せられる  
うっとりさせ  
られる。

(一) 詩人、評論家、  
創作家。名は  
昌治。新潟縣  
の人。明治十  
六年生。

四つの讚歎に輝く眼が、二羽の小鳥を見詰めてゐた。  
私もちでさした前にも、いや、生れた時から、この鶯は色々な  
鳥に養はれて來たのに相違ない。さもなければ、盲目の鳥が今ま  
で生きてゐられるわけではない。私は、父も今は鶯を捕へる氣には  
なれなかつた。そればかりか、美しい森の道德に魅せられて、石の  
様にだまりこんでゐた。

どこか遠くて駒鳥の鋭い聲がした。四十雀の群が鈴を鳴しな  
がら、次第に近づいてくるのも聞えた。森は今、眞晝の不思議な眠  
から目覺ようとしてゐるらしかつた。

#### 四 路傍の草

(一) 相馬御風

小学校や、女學校や、中學校などの生徒たちの描いた花の

[Cosmo:]  
型にはまる

繪を展覽會などで多く見るが、それ等の十中八九が、菊とか、  
ダリヤとか、朝顔とか、コスモスとか、薔薇とかいつた様など、  
ちらかと言へば、觀賞用といふ型にはまつた花を寫したり  
描いたりしたものであるのには、何時ももの足りなく感じ  
させられる。私たちは、何もさうした種類の花を描く事その  
事に、不満を感ずる者ではないが、しかし、少くとも田舎に生  
活してゐる子供たちには、さうした型にはまつてゐる花よ  
り以外にもつとく、多く美しい花があるべきはずの様に  
思はれ、その點が不満に感じられてならないのである。  
特に觀賞の爲に一般的になつてゐる花の美しさは言ふ  
までもない。しかし、さうした種類の花の外に、わけて田舎で



は山にも、野にも、背戸にも、路端にも、數限りなく美しい花が  
咲くのである。

除外する

そしてそれ等の多くの花は、特に注意しないまでも、田舎  
の子供たちの心を養ひもし、樂しませもしてゐるのである。  
それであるにも拘らず、彼等の大多數は、いざ美しい花の繪  
を描かうといふ段になると、それ等の最も親しみの深かる  
べき花を除外するのである。私たちの不満は其所にある。

「この節の若い者は、草や木の名すらろくに知らない。私は  
嘗てかうした歎聲を、或山の村の一人の老人の口から聞いて、  
成程と感じ入つた事があつた。田舎に住んでゐる私たちに  
取つて、最も親しみのある草や木の名——それをすらも



白家建築用の材木を切る

知つてゐる人の少いといふ事  
は、何といふ情ない事であらう。  
毎日自分たちの往來する路端  
に、春に、夏に、秋に咲く花は隨分  
多くある。そしてそれ等の雜多  
な草の花は、知らず識らずの間  
に私たちの心に貴い養を惠ん  
でくれてゐる。しかも私たちの  
多くは、それ等の名前すらろく  
に知つてゐない。兒童をして出  
來るだけ深く自然と交らしめ

評  
練  
三

なければならぬといふ事を、口やかましく説いてゐる小學校の先生たちのうちにすら、さうした人が少からずある。これはどうした事であらう。

かの森林生活で名高いアメリカの哲人ソローは、彼の毎日往來する路端の叢で、その日々にどこで何の花が咲くかを、大概知つてゐたといふ事である。そしてエマソンは、その一事に就いて、ソローがいかに自然を愛し、いかに自然の現象に注意深かつたかを十分知る事が出来るといふ様な事を、賞讃してゐたとかいふ事である。私たちは其所までは行き得ないにしても、少くとも毎日自分たちの往來する路傍に咲く花の美しさに心を引かれ、それ等の名前ぐらゐは

Henry David Thoreau. アメリカ合衆國の文學者。嘗て哲學者。エマソンに寄寓した。紀一八一七—一八六二年。  
Ralph Waldo Emerson. アメリカ合衆國の文學者。嘗て哲學者。研究した。紀一八一七—一八八二年。

知つてゐてもよささうなものである。

嘗て私は芭蕉の

(齊)

よく見ればなづな花咲く垣根かな。

の句の中の「よく見れば」といふ言葉——一見説明的な冗語の様に見えるその言葉の、この場合に於ける力強さに就いて、こんな事を述べた事があつた。

「よく見れば」——かう芭蕉が言つた時、彼は確かに一種の驚を覚えてゐたに相違ない。成程「かうした驚歎がそのうちに籠められてゐたに違ない。いかにもよく見れば」そこである。垣根の下土に何時となしに生えたあのぺんぺん草の様な、見る影もない雑草でさへ、人知れずつゝまじや

花しなもない

かに生きてゐる。あの小さな草にさへ、春がくればかうして花が咲く。こまかな、何のしなもない白い花が咲く。――  
 思ひがけなく、芭蕉がさうした自然の風物に心を引かれたのも、そしてそのうちに無限な興味を覺えたのも、思へば彼のいはゆるよく見ればの面影である。成程かう彼が感歎したのも尤もである。恐らくその場合、芭蕉自らにあつても、その経験によつて、平常の自分に、よく見ない時間の多かつた事の反省が起らないではゐなかつたであらうと同時に、よく見る」といふ事の貴さを、彼は恐らく今更の如く驚歎せずにはゐられなかつたであらう。此所だ、此所だ。と、彼は思はず自分の膝を打つたかも知れない。



(飯島秀子筆)

所が、この芭蕉のかうした句を生んだなづなの花の、いかなる物であるかをさへ知らない人が多い。なづなつてどんな草ですか。かう、その話のついでに私に尋ねた人があつた。へんぺん草とも言ひます。と私は答へた。するとその人は折返して、へん〜草つていふのはどんな草ですか。と尋ねた。私は呆然とせざるを得なかつた。

かう言つたからとて、何も私はへん〜草のいかなる物であるかを知つてゐる事が、大した偉い事であるとなんか

思つてゐるのではない。だが、そんな事は偉い事であらうと  
なからうと、眞に自然を愛する人ならば、それぐらゐな事が、  
わかつてゐてもよささうに思はれるだけである。  
これは自然に就いてだけではない。人間に就いても同じ  
である。

「あなた方が偉いと思つてゐる人の名を書いて御覽なさ  
い。」

定評ある

かういふ先生の間に対して、十中八九の生徒たちの書く  
名前は、大概きまつてゐる。無論さうした書物で教へられた  
り、先生から教へられたりした昔や今の偉い人たちの名を  
記憶し、それを書くのは結構な事である。しかし、さうした定

實感

評のある偉い人たちの多くの名の中へ、一つくらゐ自分自  
ら眞に偉いと實感した自分の手近な人の名がはいつても、  
よささうなものではなからうか。

私たちは、願はくは、見る影もない一莖の雜草に就いても、  
限りない自然の美と意味とを味はひたいものである。そし  
てそれと同じ様に、自分のつい手近にある唯の人に就いて  
も、限りない人間の貴さを感じたいものである。

其所に藝術がある。其所に宗教がある。

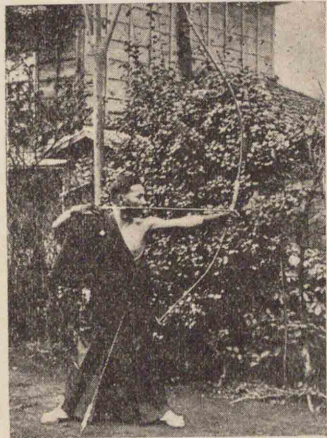
— 雜草苑 —

### 五 文章の道

鳥崎藤村

信州の小諸(二)にゐた頃、私は弓を稽古(一)した事がある。誰でも

(一)小説家。名は春樹。長野縣の年生。明治五年。  
(二)長野縣北佐久郡小諸町の城邑。舊牧野氏の城邑。



正しき弓道の姿勢

最初のうちは、的に向つて矢を當てる事ばかりを心掛ける。唯當りさへすればいゝ。さういふ時代には、幸に一本の矢が的を貫く事はあつても、他の矢は思ひも寄らぬ場所へ飛んで行く。射手の心に頼む所もなく、矢の曲直を辨別する力もなく、さうして幸に當つた矢は、高慢でうるさい、熟練を思はせるばかりだ。小諸に住む舊士族の一人で弓術に心得のある老人が、私たちの矢場に來た。その老人が先づ「姿勢」を正す事を私たちに教へてくれた。それからの私たちの矢は、たとひ的を貫く事が出来ない様な場合でも、一手づ

焦心する

つそろつて、同じ場所へ行く様になつた。これは文章の道にも當てはめて見る事が出来る。唯面白い文章をのみ作らうと思つて焦心する事は、決して目的を達する途でない。眞に好い文章を作らうと思ふ者は、どうしても先づ「自己」から正してかゝらねばならない。

同じ頃私は家の裏にある畑に出て、くはを執つた事がある。讀書の傍、よくそのくはを擔いで行つて、土を耕して見た。私は先づ荒れた畑の地面を掘起す事から始めた。土を砕いた。小石を擇分けた。地ならしをした。汗を流してそれをやつた。葱の苗や、馬鈴薯の芽の様な植易い物から作つてみた。そ

(豌豆)

の畑には大根、白菜、茄子、えんどう、胡瓜などの類をも植ゑてみた。草を取りに行き、土を掛けに行つた。馬鈴薯の花が白く盛な頃に出て、試に土の中を探つてみると、はや丸いのが幾つも根元の方から出て來た。えんどうの蔓が長く伸びて、人の脊よりも高く絡みついた。畑の中には、嫩く生つたのを摘むはさみの音が聞えた。粗末ながらも自分で作つた新鮮な野菜が、私の食卓に上る様になつた。それから私は周圍にある耕地を見て廻り、本當な百姓の手で好く整理された畑の間などを歩き廻るたびに、耕作の苦心といふものが、痛切に自分自身に感じられる様になつた。私は或耕地を通つて、非常に嚴肅な念に打たれた事を、今でもよく思ひ出す事が出

嚴肅

(缺)

來る。わたしたちが文章の手本とすべき物は、何程わたしたちの周圍にあつても、それを悟らうとするには、どうしても先づ自分で試みなければならぬ。試みる「といふ事は、悟る」といふ事の初だ。

(一) 東京市淺草區  
界限

淺草の新片町に住んだ頃、家は淺草橋に近くて、私はあの隅田川の界限を漕廻つた事がある。最初のうちは、むやみと手足を動かさし、あの長さ一丈許もある櫓を、前へ押し手許へ引きして、骨折つてみた。それでも舟は思ふ様に進まなかつた。次第に私は手足を動かさず事が少なくて、身體全體の力でゆつくりと櫓を押す事が出来る様になつた。向ふから大きな

傳馬

傳馬がやつて來たぞ、あれに一つ突當らない様に。さう思つて漕いで行く樂しみなども、それから起つて來た。それから船頭のする所を見ると、實にゆつくりしたものだ。其所には力の省略がある。簡素の美がある。文章の道でも、むやみと筆を弄する事が、決して自己の眞の表白とはならない。

結晶

— 飯倉だより —

(一) 江戸時代の儒者、博物學者、筑前の人。正徳四年(一七三四年)歿。年八十五。

### 六 學問する者の第一に

心得べきこと

(一) 貝原益軒

學問は先づ志を立つるを以て本とす。志とは心のゆく所

(一) 「有ル志者、事竟成也。」(後漢光武帝の語)

せらなる志

(二) 「玩人喪德、玩物喪志。」(書經)

なり。道を知り行ひて君子に至らんと思ふ心常に怠なく、念止まざるを、志を立つると言ふ。志立たざれば學ぶ事成就せず。故に古人も、志ある者はその事竟に成ると言ひ、また志立つは學の半ばなり。と言へり。例へば弓射る者の的に志し、道行く者のやどりに志すが如し。よろづの事、先づ本をつとむべし。志を立つるは學問の本なり。志を立つるには勇猛なるべし。柔弱にして怠るべからず。怠れば驗なくしてはかゆかず。道を求むるにせちなる志は、例へば飢ゑて食を求め、渴きて湯水を求むるが如くなるべし。わづかに悠々として怠れば、志すたる。唯この道に心を一すぢにすべし。外物に心を奪はるべからず。物を玩べば志を喪ふ。と尙書にも言へり。言

道義の學

ふこゝろは、耳目口體に好む所の外欲に耽り、外物を好み、或は無益の雜藝を一向にすき好みて、心をかたぶくる類は、皆これ物を玩ぶなり。かくの如く外物に心をうつせば、道を學びて君子となる志を失ふ。よろづの外物のもてあそび、このみ、皆志をそこなふものなり。程子曰く、專一ならざれば、すぐに遂ぐる事能はず」と言ふこゝろは、一すぢになさざれば、行ひとぐる事なり難し。專一とは、例へば猫の鼠をねらふが如く、雞の卵をあたくむるが如く、他念なきをいふ。心あなたこなたに分るれば、學問道義の志は衰へすたる。文藝、武藝は誠に士たる者の習ふべき事なれば、つとめ學ぶべし。されども藝は末なり。道義の學は本なり。藝をひたすら好めば、必ず學

の志を奪はれて失ふものなり。況や私欲のなぐさみこのみにまかするをや。いましむべし。志を立つるは、例へば、西國の人のあづまへ行かんと思ひ立つが如し。日々に行くに、その間晝夜あづまへ行かんと思ふ心は、念々つねに止まず。これあづまへ行くと志立つなり。かくの如くなれば、遂に志す所に行きとゞかずといふ事なし。道に志すもまたかくの如くなるべし。

およそ學をするには、教を受くる基もとを立て、また禁戒を守るべし。基とは家を造る土臺なり。學問する人は謙を以て基とす。謙とはへりくだるなり。我が身にほこらず人に高ぶらずして心を空しくし、人に問ふ事を好み、我が才を頼まず、師



友を敬ひ、我が身に才力ありてもなきが如くし、教をよく聴き、人の諫を喜び、既に知れる事も、知らざるが如くにして我が知を先立てず、既によく行へる事も、未だ行はざるが如く思ひ、人を責めずして我が身を責むるを、へりくだるといふ。これ學問をつとめ教を受くる基なり。例へば、家を造るに先づ基を立つるが如し。この基あれば日々に善言を聞き、我が過を知りて知明らかなり、善日々に長ず。學の進む事きはまりなし。また禁戒を守るべし。禁戒とはいましめて行はざるをいふ。學問する人は、先づ矜きやうの字を禁戒とす。矜はほこると訓む。ほこるとは、我が身に自慢して人にへりくだらざるをいふ。未だ知らざるを既に知れりとし、よからざるをよし

もはら

とす。もはら我が知を用ひて人に問はず、人の諫を用ひず、身を責めずして人を責む。かくの如くなれば悪日々に長ず。初學の人は先づこの禁戒を守り、またこの基を立つべし。然らざれば、學んでも益なきのみにあらず、かへつて害あり。これ書を讀み學問する人の第一心得べき事なり。——大和俗訓——

七 五月の頌

川路柳虹

(一) 詩人。名は誠。  
東京市の人。  
明治二十一年  
生。

(琥珀)

五月の空のかゞやかしさ。  
こはくにけぶる地平のはてに、  
何の花かたゞ光る。  
緑の芝生に寝轉んで  
高いく空の青を望めば、

たゞ躍る胸の楽しさ。

あゝ、五月、々々。

青春と希望との五月。

一草の莖を握つても

その葉に溢れる生命を感じる。

土も匂ひ、空氣も匂ふ、

祝福された五月よ。

君も若く、僕も若く、

そして桃色の頬に

輝く微笑を、さわやかな風が

遠い未來の空へと送る。

八 農夫と茶の湯

柳澤 淇園<sup>(一)</sup>

<sup>(一)</sup>大和郡山藩の重臣。名は里恭。寶曆八年(二四一八年)歿、年五十三。  
<sup>(二)</sup>今の東京市の東郊南葛飾郡(千葉縣)あたりをいふ。

山海の珍味

茶を點つ

場うて

江戸葛飾<sup>(一)</sup>のほとりに、權兵衛と言へる村長<sup>(二)</sup>あり。或年の春、伊勢大神宮へ太々神樂を奏せんとて、村民十三人と共に御師<sup>(三)</sup>何がしが家に宿れるに、山海の珍味を盡して馳走ありて後、各に薄茶まゐらせんとて、案内して茶室に招き請じければ、かの村長を初めとして十三人席に著きけるに、御師は丁寧にあいさつして、心を配り茶を點てて、權兵衛が前に出し置きけれども、農夫の身にて、茶道の心得はいさゝかもなければ、大いに心を苦しめ、場うてして思ひけるは、いかにして飲むべき。人の話にも、茶を飲みたる上にて順に廻すなどと

鼻あかす

聞きしが、十三人へ一杯ばかりの茶を飲みかけ廻したりとも足るべからず。また一人して飲み、他の者に鼻あかせん事如何なれども、われ村長の身として、今更聞きて飲まんも口惜しき事なり。と、さまざま、心の中に思ひ廻らすうちに、御師は先に出し、口取菓子を取上げて残らず飲み、前にせ給へ。と強ひければ、はつと茶を取上げて残らず飲み、前に置きければ、御師は取りて茶碗をすすぎ、また點てて村長が前に出しつゝ、いざ菓子をとり給へ。と言ふに、このたびは菓子を取りて食ひ、また茶を残らず飲み、前に置きければ、御師また取りてもとの如く點てて、また村長が前に出す。村長言ひけるは、我等はもはや澤山下されたり。と言ふに、さあら

隠遁  
手すさび

不見識

ば次の方へ御送りあるべし。とて、この順にして各一碗づゝ飲み、辭退して座敷に入りて、各窃にその心勞を物語りつゝ、臥し、またも茶の饗應あらばいかばかり迷惑すべき。早く暇乞して歸國するには如かじ。とて、あくるを待ちて發足せり。後に權兵衛余が許に來りて、願ひたき事の候。と言ふに、いかなる事ぞ。と問ひければ、過ぎし春、伊勢にて恥を得し事はべれば、茶の手續を教へ給はるべし。とて、しかゞの事を物語り、今に忘れ難く、恥づかしく、また口惜しく覺えき。と言ふに、余大いに笑ひて、その許は日頃に似氣なき不見識の人なり。農夫は農家に人となりて、農業の事にさへ詳しければ、恥づかしき事なかるべし。茶はもと隠遁の手すさびにして、その

許<sup>筆の致スベキ事ニアルス</sup>道日用に足れりと雖も、農夫、町人などの致すべき事にあらず。世を遁れし隱居の後などはともあれ、その許若し茶を學ばんに、(一)村皆これに倣ひて農事を怠りなば、田畑は悉く不作なるべし。村長茶道を知らざるが故に、耕耘收藏時にたがはず。國中百人耕して五十の遊民あらば、その國必ず飢<sup>ル</sup>ぬべし。百人耕して十人遊ばば、その國果して豊かなり。と言へば、權兵衛感じて、茶の湯を習ふ事思ひとまりぬ。

— 雲萍雜誌 —

(一)江戸時代の醫師、國學者。名は春暉。宮川氏。伊勢の<sup>人</sup>。文化二年(一八四五年)歿。年五十三。

九 篤 實

橋 南 谿

余が諸國を巡りて、備後の國を通りし時、百姓と見ゆる年

野服  
方頂巾

老いたる男二人、ふと道づれになりぬ。山の名、里の風俗など尋ね問ひて行きたりしに、その一人、我が野服を著し、方頂巾



橋南谿像

を戴きたるを怪しみて、「いかなる人にて、いづくよりいづくへ行き給ふにか」と問ふ。我は都方の醫者なるが、醫術修業の爲に諸國を遊歴するなり。と答ふれば、「さても頼もしき御人や。我等が住む里は向ふの山の奥なるが、親しき家の女房に奇妙なる難病ありて、はや二年になれるが、近きあたりに住み候へば、聞くもいぶせし。その家にも色々」と醫療盡さざる事はなけれど、露ばかりの驗もな

いぶせし

(一)今廣島縣(備後國)尾道市。

く、今ははや命危く見え候。かゝる山深き片田舎なれば、名高き醫師も候はず。あはれ、都近くもあるならばなど、親類の者どもは歎き居り候。今日は圖らずも巡り合ひて、京都の御醫と承り候へば、親類どもが常々の詞も思ひ出されて、あはれにも候へば、何とぞ脈ばかりにても取らせ給ひて、彼等が心をも慰め給はらばや」と、誠の心言葉に出でて、また餘儀もなく見えたりしかば、余も「この道修業の事なれば、いと易き事なり」とうけがひて、かの者どものしりへに従ひて、尾道の二三里ばかり此方より、右の方に分入りぬ。  
鹿狼の通ふ如き細道を、谷に下り峰に上りて、行けども行けども程遠きに、日影もやゝ傾きて、腹饑ゑ、足疲れたれば、僕

とかう

は腹立ちて、程も知れぬいたづら事とつぶやく。とかうなだめて行く程に、やう／＼に到り著きぬ。とある山あひのいと寂しき里にて、本郷といふ所なり。

その家に入れば、病者は五十ばかりなる女にて、その夫を六兵衛といふ。案内の者しかゝの由を言へば、家内皆驚き悦ぶ。病者は、去年の冬より、難治の病に罹り候ひしが、次第に重りて、果ては腹裂くる心地して、苦しみ譬へん方なく、日々月々に病つものり、春の頃よりは一入にて、横に臥せば下腹一入裂くるが如く、立てば苦しく、坐すれば堪難し。それ故、晝夜唯火燵の櫓に兩手をつかへ、立ちながらうつむきてをる時のみ、少し心安らかなる様なれば、春以來はかた時も坐せず、

腫氣

臥さず、唯晝夜食ふにも眠るにも、この通りなり。その苦しみ  
なかく、申すも愚かに候。近き頃は殊に悪しく候へば、命の  
限りも遠からじと、一日も早く臨終をとのみ待居り候。命の  
事は助かるべくも思ひ候はねど、都の人と承れば、ゆかしく  
こそ候へ。何とぞ一日なりとも、この苦しみを助け給ひて、横  
に臥して安らかに永眠するを得しめ給はば、上もなき御恵。  
と涙を流せる様、げに見るさへあはれなり。晝夜立ちてうつ  
むきをれば、足は柱の如く腫氣ありて、顔もまた眼ぶち腫れ、  
額も浮きて、生きたる人の如くにもあらず。一しきり一しき  
り腹はりくる時は、苦しみの聲隣を動かし、聞く者すら堪へ  
かねたり。病體は誠にかくの如く危けれど、その脈に見所あ

(一)廣島縣(備後國)御調郡。淺野氏の舊城下。

粗忽

りければ、急ぎ藥を與へ、尙藥湯をもて腰より下を漬し、種々  
の療術を用ひしかば、やがて通利出で來て、始めて横様に臥  
す事を得たり。尙しなぐの療治を加へ、この以後に用ふべ  
き藥方を委しく書きしるし、用ひ方などまでも細かに傳へ  
置きて、その家を辭して、數里の深山を分出でて、三原(一)の城下  
に著きぬ。

三原にてこの物語をせしに、さても危き事なりき。御心に  
誠ありたればこそ佛神の助もありて、誠の事に逢ひ給ふな  
らめ。かくの如き事は、多くは盜賊の詐る事にて、旅する人を  
人なき深山に連行き、刺殺して金銀衣類を奪ふ事珍しから  
ず。この後は必ず粗忽のふるまひし給ふべからず。と言ひけ

(一)京都市下京區

るにぞ、始めて心づきて、恙なかりし事を喜びき。  
それより諸國を巡り、二年を過ぎて京に歸りゐたりしに、  
或日六條の旅宿のあるじ訪ね來り、「一兩年以前、九州へ赴き  
給ひし御醫者はこなたなりや」と問ふ。いかなる用ぞ」と聞け  
ば、「備後の國より六兵衛といふ百姓一人上り來り候ひて、下  
に市の字の附きたる御醫師を聞及ばずや。何とぞ尋ねくれ  
よ。去々年しかど」の事にて高恩を受けたれば、御禮の爲に  
來りたり。その御名は聞かざりしかども、荷物のさげ札に市  
の字ありしを見覺えたり。」と申す。手がかりもなき尋ね様か  
なと存じ候へども、その志殊勝にも候へば、先づ標札を見巡  
りて、市の字を見當て候へば、お尋ね申すなり。」と言ふにぞ、そ

手がかり

(一)平安時代の高僧。名は空海。唐に渡つて眞言宗を傳へ、金剛峯寺を開いた。承和二年(一四九五年)寂。年六十二。  
(二)本名金光明四天王教王護國寺。略して教王護國寺。京區。今眞言宗本山。弘法大師の御禮も申さる心のうちも安からず、若し逢ひ奉る事かなはずば、東寺にても參り候ひて、弘法大師様へ御禮申して歸

の事あり。」と言へば、乃ち歸りぬ。その次の日、かの六兵衛、旅宿のあるじと同道し來りて、備後疊を自ら持ちて「禮物」とし、さても過ぎし年は不思議の御縁にて、妻なる者御療治に逢ひ、命はなきものと覺悟致し居り候ひしを、その日よりして驗を得、仰せ置かれし日限の如くに、さしもの難病も平癒して、再び常體の人となり候ひぬ。近所の者の行きさひより始りて、御名さへ承らず候へば、弘法大師の來らせ給ふなりとのみ、一村にて評判致してこそ候へ。京を尋ねたりとも、逢ひ奉るべしとは圖らず候へども、命助かりし御高恩に、ひと言の御禮も申さる心のうちも安からず、若し逢ひ奉る事かなはずば、東寺にても參り候ひて、弘法大師様へ御禮申して歸

るべしと存じ極めて参り候ひしなりひしなり。先づは尋ね當てて、日頃の本望を遂げ候。とて、眞實顔色に現れたり。余も嬉しくて、暫しもてなし慰めて、歸しやりぬ。都近くの者ならばの者ならば、百里に餘れる海山を、いかではるく、尋ねくべき。邊土の民の篤實なる事、感ずるにも尙餘りあり。

—西遊記—

一〇 大なる人物

山路愛山

(一)史論家。名は彌吉。静岡縣大年。大正十六年歿。  
科學的

世に大きな人物と小さな人物といふ事あり。いかなる者が大きくして、いかなる者が小さきかと、科學的に説明するは難儀なれども、とにかく、大きな者と小さな者とのある事は勿論なり。豊太閤はその中にて殊に大きな人物と見えた

(一)天正十八年(一五九〇年)小田原の北條氏直を討伐した。佐野(栃木縣安蘇郡)城主。弟。修理大夫。と稱し、天徳寺入道。伯と號した。慶長六年(一六二〇年)歿した。四十一歳で歿した。



豊太閤 (明不者筆)

り。太閤小田原征伐の後、奥州に下向せんとて、途中にて佐野天徳寺を招き、信玄、謙信の様子を聞き、さ様にはかをやらざる小刀利がたなきの武道にては、天下に思を掛くる事は、なか思ひ寄らざる事たるべきなりと言ひたりといふ。小刀利の一句、信玄、謙信の事業を評し得て、骨髓に達したりと言ふべし。一家共に兵法に掛けては比類なき英雄ながら、力の入れ所が小さき所に局したるが故に小刀利なり。太閤はさ様の小さき所に力癩ちからいぼを入れず、恰も大風の吹

局す

一〇 大なる人物

五



(一)小瀬甫庵の著  
 事蹟を記した  
 豊吉一巻の  
 歴史。甫庵は  
 初め豊臣秀次  
 に仕へ、豊臣  
 秀次が死すに  
 後、雲州侯に  
 仕へ、加州侯  
 に仕へ、寛永  
 七年(二二九  
 〇年)歿す。  
 (二)今の熊本縣八  
 代郡八代町。八  
 球磨川の川口  
 にある。

安堵

門前市をなす

く様に、ばつとしたる行き方なり。(一)甫庵太閤記に、天正十五年  
 島津征伐の時、太閤既に肥後國八代まで進みたる事を記し、  
 さて八代にて太閤一夜沈思しけるは、遠國の果まで毫髪も  
 残さず退治せんと思ふは小志なり。残る城々は免しおきて  
 急ぎ歸陣し、四方泰平の謀計に及ぶべしとて、或は一揆、或は  
 仁俠せし僧坊残らず御免なさる、條罷り出で安堵の御禮  
 申し候へと高札を立てしかば、これは寛宥の御下知かなと  
 悦びあひつゝ、方々より集り來り、御禮申し上げんとて、門前  
 市をなす事、恰も朝禮の如しと書きたり。萬事はかの行く事  
 を主とし、荒ごなしにこなしつけて、更に小事に拘泥せず、大  
 體より片付くるは太閤の筆法にして、これ即ちその大きな

普請

人物たる所以たり。大斧にて大割すべき物あり、小刀にて彫  
 刻すべき物あり。小刀の彫刻はいか程精妙にても、大木は伐  
 倒せぬものなり。信玄などの行き方を見るに、國の仕置も巧  
 にして兵法も鋭けれども、精力を用ふる所、いはゆる片端よ  
 り堅めて行くといふ流儀なれば、人生五十の短生涯にては、  
 ととても天下は望むべからず。太閤はこれに反し、寛闊粗大、萬  
 事急ごしらへの普請なれども、その骨組は日本國を狭しと  
 す。何物にも拘泥せず、何物にも頓著せず、怨を忘れ、仇を思は  
 ず。人を嫉まず、人を恐れず、直截簡明、唯大きな所より手を  
 著けて、大きな事をなすのみ。これその一代に卓絶して、よ  
 く群雄を駕御したる所以なり。剛情者の徳川殿を、色々の手

(一)天正十四年  
(二三四六年)

入洛  
黃門

席卷す

(二)今川氏の臣松  
下加兵衛之綱

心して

段にてとう／＼京都に招きたる十月二十四日、家康入洛といふその夜、自身旅館を訪ひ、黄門豫て知り給ふ如く、秀吉今官位人臣を極め、兵威四海を席卷すと雖も、もと松下某が草履取りて追隨せし奴僕とは、誰か知らざらん。やう／＼織田殿に見立てられ、武士の交りを得たる身なれば、天下の諸侯陽に畏服するが如しと雖も、心より實に歸順する者なし。今被官となりし者ども、元は同僚傍輩なれば、實の主君とは思はず。願はくは、近日表立たしく對面申さん時は、その心して給はるべし。秀吉に天下を取らせらるゝも、失はしめらるゝも、卿の御心一つにあり。この事頼み奉りたくて、かく上洛をば勧めまゐらせたり。とて、徳川殿の背を叩きたりといふ。徳

赤心

(埒)

川殿もこの裸體的の率直なる白狀に對しては、唯依頼に應ずる外はあるべからず。他人ならば千里も迂廻して行く路を太閤は極めて短き直線を取つて進む。禮儀も、作法も、遠慮も、人前も、彼が突進する脚下に蹂躪せらる。この時に方りては、赤心ありて權略なく、裸體ありて衣裳なく、眞實ありて繩墨なし。規律に拘らず、早くらちの明くを旨とす。さ様にせんとてわざとなしたりとて、人爲の跡見えては、滑稽に類すれども、この人は自然に斯様の大きな性格を備へたれば、群雄も遂にその下に服したり。

— 愛山文集 —

赤心  
テイスルイノ控

(一)國文學者、文市博士。福井二年歿。年昭六十一。

宇治川先陣 壽永三年(一八四四年)朝が木曾義朝討つた時、義仲は宇治、勢多の橋を引いたので、頼朝、恩顧の武士、佐々木と梶原とが互に先陣を争つた。  
(二)秀義の子。四郎と稱した。  
(三)景時の子。源太と稱した。  
(四)秀義の子。三郎と稱した。  
(五)兒島灣(岡山縣)の西、水島灘に通ずる狭水道。後世閉塞した。

自修文

人の美を成せ

芳賀 矢一

運動競技の場合に、人を推しのけても自分が第一著にならうとする様な卑劣な行爲は、試験の時に人の答案を竊み見るのと同じ心根である。この點から見ると、宇治川先陣の佐々木高綱などは、最も卑怯な武士である。梶原景季の第一陣となるのを恐れ、馬の腹帯が緩んだと欺いて、自分が先頭第一となつた。その兄の佐々木盛綱は、藤戸の渡の先陣をしようとして、或漁夫に尋ねて、淺い所を教へてもらひ、その漁夫がこれを他人に漏らさうかと危んで、これを殺してしまつた。何といふ卑劣な、残忍な所爲であらう。これ等は皆自分の功名に急な爲に、悪手段を取つたもので、一時は恩賞を得たかも知れないが、醜名を萬世に遺してゐる。我等の心事は公明正大であらねばならぬ。自己が最善を盡した後、し

ぬかり 油断してし損ずること。失策すること。

かつぐ 欺く。だます。

かも尙負けるならば、決して恥辱ではない。最善を盡さないで負けるならば、それは自己のぬかりである。最もいやしむべきは卑劣である。自己にぬかり缺點がありながら、萬一の成功を望むのである。元來無理な願望である。

不正手段で成功を釣らうと思ふ者は、必ずうそ即ち虚言を言ふ。高綱も虚言を構へて景季を欺いた。虚言は眞實の反對であるから、虚言を構へる者は直ちに人の信用を失ふ。信用を失つては何事にも成功しない。成功、不成功の如何に關らず、人として恥づべき事である。いかに小さな事でも、虚言をしてはならぬ。戯に虚言を構へて友人をかついで、後で笑つたりするのも宜しくない。心にもない事を大言壯語する事、いはゆるほらを吹くのも虚言の一種である。些細な事と思つて虚言し大言して、一時の快を取つてゐるうちに、何時かそれが習慣となつて、本當のうそつき、ほ

人の美を成せ(自修文)

悪し様に  
悪いやらに。

ら吹となつてしまふのである。虚言で成功する事は勿論ないし、ほらで吹當てるといふ事も決してないのである。  
自分の劣つてゐる事を知りながら、自分より優つてゐる者を見ると、羨んだり妬んだりする者がある。これを嫉妬といふ。物を羨む心は子供の時からあるもので、各國の童話にはこれを戒めたのが多い。我が國の童話でも、花咲爺や舌切雀の話などは、皆物の戒である。物を羨む心が長じてはねたみ、そねみとなる。古來この心の爲に、身を亡し家を滅した者は數限りもなく多い。己の力を量らないで、敵として抵抗を試み、遂に亡された例はいくらもある。平常親しく交る友の間でも、この嫉妬心があつては、甚だしい卑劣な行爲を敢へてする様になる。他人の悪口を言つたり、他人を陥れたりする様な悪行を敢へてする様になるのである。自己を善ならしめ大ならしめる爲に、他人を悪し様に言ふの

讒誣

無實の事をいひ立てて人をいそしめること。

(一) 景清の子。平三と稱した。

げぢ 多足類の小蟲

に似て長さ一寸ばかり

の蟲になりかざると頭は

かざると人に見えぬ

蟲といはれるが、梶原

の時は、景時から來たの音讀である。

(二) 靜岡縣(駿河國)安倍郡豐田村の大字。今に景時一族の跡殺された遺址がある。

穢滅 みなごろしに滅す。つくしに

座右の銘 自分の座に置いて

いふ

も、一種の虚言であつて、これを讒誣といふ。古來讒言で最もよく知られてゐるのは、梶原景時で、その爲、人に忌みきはれて、げぢが蟲が一名梶原蟲といはれる程であるが、彼の末路を見よ、駿河の狐崎で一族穢滅されて、萬世までの死恥をさらしたてはな

「人の短をいふこと勿れ。  
己が長をとくこと勿れ。」  
銘にいふ、

人の美を成せ(自修文)

常に身の戒とする金言。第一  
 第三十一代用  
 明天皇の御推  
 皇太子。御名は  
 既戸皇の攝政  
 古天皇の内治  
 外交力を對  
 等國を對  
 して國威を輝か  
 階、冠位十條の二  
 階、冠位十條の二  
 君臣の定めを明  
 多かた功績を  
 古天皇の御推  
 九年(一)二  
 四年(一)二  
 島國根性  
 島國に生長し  
 狭小な根性  
 勢即ち世界の情  
 國民全體が心  
 舉國一致  
 を合せること

ものいへばくちびる寒し秋の風。  
 とある。つまり、ほらと悪口とを自ら戒めたのである。  
 聖徳太子は、我既に人を嫉めば、人また我を嫉む。嫉妬の患その  
 極を知らず、と訓へられた。日本人間には、とかく他人をけなす風  
 がある様である。その原因は何であらうか。世人はこれを稱して  
 島國根性といふ。しかし、同じ島國でも、英國の人にはさういふ風  
 は少い。今暫くその原因を論じないが、我等は我が國民の短所と  
 知つた事は必ずこれを改める様に覺悟しなければならぬ。どの  
 地方の人に聞いてみても、私どもの郷里には、どうも他人の成功  
 を悪くいふ癖がある。と言ふ。或外國人は、日本人の批評を聞くと、  
 日本國中には一人の偉人もゐない。と言つたさうだが、實に恥づ  
 かしい事である。かういふ氣風のまゝで進んで行つては、舉國一  
 致などといふ事は、到底思ひも寄らぬ。舉國一致といふ事は、萬一

の場合にのみ必要なのではない。平和の戦争にも必要なのであ  
 る。日本人はすべからく、

隣で藏が建てばこちらでは腹がたつ。  
 といふ様なけちな嫉妬心を棄てなければならぬ。

一一 本多重次

新井白石

天正十三年、徳川殿御背中に疔といふ物出で来て、既に危  
 く見えさせ給ひしかば、内外の醫療術を盡しけれども、その  
 驗なく、唯弱りに弱らせ給ひ、自らもこれまでと思し召しけ  
 るにや、宗徒の御家人等召集めて、御あとの事ども仰せ置か  
 る。人々の周章言ふに及ばず、土民、百姓等に至るまで、その程  
 程に隨ひて祈らぬ神佛もなく、立てぬ願もなし。

(一)學者。徳川幕  
 府の政治顧問  
 名は君美。江  
 戸の三人。享  
 五年(一)三  
 六十九。歿  
 年八保

(一)通稱作左衛門  
三河の人。文  
祿五年(二二  
五六年)歿。  
年六十八。

あつたらし  
き命

(一) 重次御枕に取附きて泣くく申しけるは、殿も定めて覺えさせ給ひなん。重次が昔この病を受けしに、立所に驗を得し良醫の候。彼を召して見せ試み給ふべし。と申す。諸醫既に手を束ね、家康また死を決す。この上醫療そのせんなし。且は命を惜しむに似たり。とて用ひ給はず。

重次大いに怒つて、斯程大事の腫物軽々しく思し召し侮つて、事急なるに臨めばこそ諸醫も術盡きぬれ。それにまた良醫して治しまゐらせんとするをも用ひ給はず、失せ給はん事、御心がらとは言ひながら、あつたらしき命かな。諸醫術盡きぬと申す上は、彼いかでか治しまゐらすべき。年老いたる重次が御あとにさがつての御供かなふべからず。さらば

御先へ參らん。とて、御前を罷り立つ。

徳川殿大いに驚かせ給ひ、あれ止めよ。と仰せければ、近く侍ふ人々走り出で引止め、仰せらるべき旨あらせられ候。と言ふ。重次大いに聲を怒らして、最後の暇乞うて罷り申す者を見苦しい殿ばらの止め様や。と罵つて、出でんとす。されば候。その人を止めよとの御使が、えこそ止めねと申せとは、おとなしくも候はぬ本多殿。と言はれて、げにさも候。とて、御前に參る。

徳川殿、汝は物に狂ひてかくは言ふか。家康まだ死し果てぬに、たとひ家康が命終るとも、汝等が世にあらんを頼にこそ死すべけれ。また汝等もいかにもして一日も世に残りて、

おきてす

若き者どもおきてして、我が家の絶えざらん様を計らんと  
 は思はずして、せんなき死の供せんとする事やある。と仰せ  
 ければ、いや、それは人によりての事に候。重次も今少し  
 年だに若く候はんには、仰までも候はず、犬死せん人の御供、  
 そのせんなし。重次若年の昔より此所彼所の軍に従ひて、眼  
 射られ、指落され、足切られて、負はぬ手も候はず。人のかたは  
 といふ程のかたはは、重次身一つに餘つて、世に交らん事か  
 なふべき身ならず。殿の御情深ければこそ、當家にては人に  
 畏れられも敬はれもしつれ。殿の亡くならせ給ひなば、他人  
 までも候まじ、先づ御駕の北條殿(一)我が國々を取らんとし給  
 はんに、若き人々が行末久しう仕へんと頼みきつたる主に

(一)家康の女壻北  
 條氏直。天正  
 十一年(一五八  
 三年)歿

踵を回らす

忽ち別れて氣後れし、はかしくしき矢の一筋をも射出す事  
 かなふべからず。當家滅されん事、また踵を回らすべからず。  
 重次それまで存へて、あの年よつたるかたは者は、徳川殿の  
 譜代にて、何がしと言はれし家人なるが、いかに惜しき命な  
 れば、かく世に恥をさらすらん。と後指さされん事、老の恥、何  
 事かこれに過ぎ候べき。この頃までも武田の人々御當家へ  
 召されて、さらぬ人にも手をさげ腰を屈めしを、世にも哀に  
 思ひしが、今はこの老人めが身の上になつて候と存ずれば、  
 殿に後れまゐらせんが悲しきばかりにも候はず、我が身の  
 果もあさましきによつて、御先に死する事にて候。と申す。  
 「汝が言ふ所ことわり至極せり。さらば醫療の事は汝が心

さらぬ人

に任すべし。天命既に至りて家康空しくならんとも、汝もまた家康が心に任せ、いかなる恥を見つべくとも、一日も生残つて、後の事よきに計らふべしと存ずるや否や」と仰せければ、重次が申す旨に任せられんには、重次いかでまた仰をや背くべき」と申す。さらば醫師召させよ」とて召さる。

醫師やがて參つて、御灸治宜しかるべし」と申せば、重次艾取つて据う。御灸の痛、覺えさせ給はねば、艾を増し加ふる事多くして後、聊か痛ませ給ふ由仰せければ、御薬をつけてまゐらせ、御薬湯をも進め奉りしに、その夜の半ばに御腫物潰れて、膿水、血、夥しう流れ出で、御惱立所に輕ませ給へば、重次は嬉し涙に聲を限りに泣く。御前伺候の人々も、感涙を共に

伺候

流しけり。

— 藩翰譜 —

一二 壇の浦

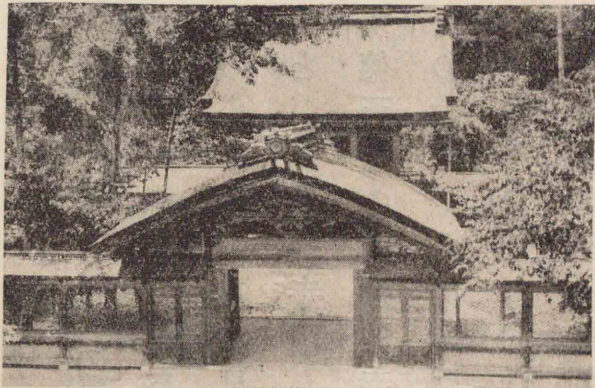
五十嵐 力

下關の停車場から海沿の往還を東へ十町餘り行くと、左手の小山の半腹に、日清談判の時、李鴻章の旅館に充てられたといふ引接寺、同じ談判の會場になつた春帆樓、それから安徳天皇の阿彌陀寺御陵、同じ天皇を奉祀した赤間宮と、昔今の大記念が、青い夏山の間に仲好ささうに並んでゐる。其所を過ぎて五六町行くと、左手には人家が盡きて、山裾の崖が暑苦しい赤い肌を見せると同時に、右手には小さい家のたてこんだ漁師町が現れて、磯の香がふんと鼻を衝いてく

(一) 國文學者、文學博士。早稲田大學教授。山形縣の人。明治七年生。  
(二) 清の大政治家。明治二十七年、清の代表として、講和の任に當つた。清の光緒二十七年(西紀一九〇一年)歿。  
(三) 山口縣(長門國)下關市外濱町にある寺。  
(四) 第八十一代。  
(五) 下關市阿彌陀寺町にある。



(一)名は時子。平  
 時信の妹で、平  
 清盛に嫁して、平  
 清盛の母となつた。  
 建禮門院の母に當る。  
 (二)清盛の第四子。  
 壽永四年(一一八  
 四年)歿。  
 (三)教盛の子。壇  
 浦の戦で、壇  
 浦の浦を二人挟んで  
 海に投げた。



赤間宮

る間もなく左の山の中腹に赤色の燈臺が見えて、右には刺  
 身形の小刻みな波の一面に廣がつ  
 た青い海が見え、やがて少し先の汀  
 に、海中へ突出た白色の燈臺の鮮か  
 な姿が目に入ってくる。  
 赤間 もう壇の浦である。源平最後の戦  
 を見て、二位の尼に抱かれた八歳の  
 幼帝を呑み、二種の神器を呑み、錨を  
 擔いだ大童の新中納言知盛を呑み、  
 左右の脇に兄弟の力者を挟んだ能  
 登守教經を呑み、さうして唐船、兵船の無數に浮んでゐる間

に、平家の衣冠、束帶、五衣、緋袴が、源氏の熊手と春風とになぶ  
 られる慘澹たる光景を見たのは、この白色の燈臺から東半



新中納言知盛

里許の浦曲で、この海岸と沖なる急  
 潮との間であつたといふ。  
 私は白色の燈臺の手前から、御裳  
 濯川の細い流の向ふへかけて十數  
 町の間を、幾たびか行きつ戻りつし  
 た。海岸には二三の苦屋と、二三の別  
 荘、料亭などが點在してゐるけれど、眺を遮る程ではない。  
 後には段々の夏山が、こんもりした姿を並べて、海水と緑を  
 争つてゐるが、その長い老松の空を透した美しい平和の峰

擁護する

(一)山口縣(長門國)豊浦郡の海上にある二つの小島。

(三)門司市の北方郊外にある。

平々坦々

峰には、砲臺が隠し設けられて、この關門の海峡を擁護してあるといふ事である。東には一里の彼方に滿珠干珠(一)の二島が優しく並んで、神代の昔の巨大な傳説を、目近に小さく見せてゐる。正面には九州豊前の山々が、五町、十町の彼方に海を隔てて小さい波を打つて居り、その麓の海邊には、和布刈(二)の神事で名高い早鞆明神(三)の白い社が、青い山の間にはぼつちりと見えてゐる。和布刈の神事は、十二月の晦日の夜の寅の刻に、神主が御鎌を提げて海中に入り、海底の和布を刈つて來て神前に供へる儀式で、その時刻には、龍神の守護によつて、今まで荒狂つた海がひつそりと鎮まり、石段の下の浪が左右に立退いて、海底の砂道が平々坦々と歩かれるといふ

(一)福岡縣(豊前國)門司市。

(三)香川縣の北部にある牛島。

事である。西の方には對岸新興の門司(一)の港が、赤く白く立連なつた繁昌の家並を見せて、その前には幾千萬の大船小船が、煙の間に隠見してゐる。さうして東西南北にこの美しい山と、島と、社と、港とを控へた内海の眞中には、日本第二と呼ばれる潮流があつて、一時間十七海里といふ恐しい速力で、朝夕毎に東より西へ、西より東へと流れてゐる。(二)屋島を遁れた平家が、海からは義經に追はれて此所にくると、陸には範頼の大軍が矢先をそろ



壇の浦

返忠  
(一)この日平氏が亡びた。

へて待構へて居り、沖には一時間十七海里といふ急潮が大浪を揚げて、九州への逃路を絶つてゐる。その上、身方には返忠があり、内証がある。(一)壽永四年三月二十四日に於ける平家の運命はまさしくこれであつた。平家物語に、  
彼所の岸に著かんとすれば、波高うしてかなひ難し。此所の汀に寄せんとすれば、敵矢鋒をそろへて待ちかけたり。源平の國あらそひ、今日を限りとぞ見えたりける。  
とあるのは、下關を標準として九州の向岸、中國の手前岸を、此所彼所と書分けたのであらう。私は筆拍子の出任せな文飾として、軽々しく讀去つてゐた文句が、實境の簡潔な寫實である事を知つて、驚いたと同時に、涙に溺れさせられる幼

(一)第八十二代後鳥羽天皇の延臣。傳未詳。

帝を、鈍色の二衣に抱いた二位尼を始め、この三方の壓迫に絶望して水に赴いた一門最後の悲劇が、幻に見える様な心地がした。この地方の傳説に、平家物語の作者の信濃前司行長が、暫く阿彌陀寺に滯留して、平家を書いたと言つてあるが、或は事實であらう。前に引いた文は、壇の浦をまのあたりに見て、下關本位に著筆する便宜を有しない者の、到底書き得ない所である。

壇の浦の漁家に寓して二年を送つたといふ若い友人は私に向つて、

「壇の浦程の景色は外にあるまいと思ひます。私は二年間毎日朝夕に見て居りましたが、曾て飽くといふ事を知り

風致

ませんでした。

と言つた。私は景色としての壇の浦をさ程偉い物とは思はぬ。壇の浦の風致は、三景は固より、同じ縁續きの屋島などに比べても、恐らく幾段か落ちるであらう。けれどもその波の底、島の蔭、磯山の裏に押疊んでゐる歴史の意義、人生の味はひに至つては、何所の何の浦、何の山、何の森、何の里がこれに頷頷し得ようぞ。遠く仲哀の悲史、神功の悲壯史から平家の哀史、太閤の壯遊を経て、維新の外艦砲撃、二十八年の日清講和の談判、乃至乃木將軍のこの頃に至るまで、凡そ我が國を大いにし、清くし、高くし、味はひ深からしめた事に對して、この浦、このほとりが、どれ程深い縁故を持つてゐるであらう。

頷頷する

縁故

介錯

殊にこの浦、このほとりは、あはれな平家に美しい介錯を與へた所、必至の運命に操られ、應報の荒波に玉體を沈めさせられた王者の最期を見奉つた所、最も驕れる者の最も悲惨な末路を見た所、王者の傷ましい崩御を二度まで見た所である。光明積極の方面は暫く言はず、この日本の曾て見た最大最深の悲哀を集めた點だけでも、我が壇の浦は誠に味はひ盡くせぬ意味深き名所と言ふべきであらう。

一三 沈黙の塔

下田將美

私の机の上に早咲のけしの一鉢が置いてある。青い千代紙を縮らして造つた様な、柔かい、ひだのある葉を持つた莖

(一)新聞記者。神奈川県の人。明治二十三年生。  
(芥子、罌粟)  
(襦、襷)

束の間

が、五六本ひよろ／＼と伸びて、その先に花をつけてゐる。ただつぼみのものは青い萼を固く閉ぢて、つゝましくうつむき、二つだけがぱつと華やかに開いてゐる。その血よりも紅い鮮かな花瓣を見てゐると、紅絹よりも薄い感じが、はかなさその物の姿とも見られる。この花は脆く散る爲にばかり咲くのではあるまいか。束の間の美しさが目立つて鮮かなだけに、見てゐると、しみ／＼寂しくなつてくる。

私はじつとその花を見詰めながら、色々と心に浮ぶこの花の思出を追つて行つた。

[France. (佛蘭西)]

<sup>(一)</sup> フランスの野には、血の様なけしの花が、到る所に野生の

[Annoncier.]

まゝ咲亂れてゐる。美しい牧場に薄紫の矢車草と混り合つて咲くけし。<sup>(一)</sup> マロニエの並木の影を映す野の小川に、岸邊をべつとりと彩るその花。目に浮ぶ追想の景色はさまざまであるが、中でも、いかにこの花らしい寂寥の感じに打たれたのは、落莫たるフランスの戦跡で見た時であつた。

[Reims.  
[Berry-au-  
Reo.  
[Hindenburg  
line.

<sup>(二)</sup> ランスからベリー・オ・バックまで續く一筋の長い街道に立つと、右も左も一面の荒果てた原で、いはゆる<sup>(三)</sup> ヒンデンブルグ線のあたり、ありし日の悲痛な面影をとめて、鐵條網が破れたまゝに張廻してあつた。廣い原は砲彈の爲に掘返されて、見える限り赤土の膚を現してゐるが、自然は、草は、その荒み果てた地膚の間にも、初夏の心を忘れずに、可憐なけし

(錆、鏽)

對照

の花を咲かせてゐた。さびた鐵條網に抑へられながら、血の様な花が固まつて咲いてゐる姿は、詩人ならずとも、多少の感慨なしには眺められぬ情景であつた。互に殺し合ふ人類の争鬭の姿と、どんな悲惨な人間の悲劇にも無關心に咲く野の花と、黙つて見詰めてゐる間に、しみとくと自然と人生との對照を思はせられる。

路の邊に形ばかりの十字架を幾百と數も知れずに立てた所がある。何れも過ぎし日の大戰に、此所で生命を捨てたもののふの寂しい形見の影である。貴い人間の生命も、此所では一瞬の間に何百となく塵の様に失はれて行つたのであつた。私は黙々として限りなき悲しさを心に抱きながら、

累々たる粗末な十字架の林に目を落した。無心のけしはそよとの風にも堪へられぬかよわい花を、やはり其所にも咲かせてゐた。

人知れず咲いて、人知れず束の間に散つて行くけしの花。祖國の爲に遠いこの戰場まで出征して、名もなくて戦死した聯合軍の戦士たちの墓。この墓にこの花が咲くのは、この上もなくふさはしくはなからうか。

それ以來私はけしの花を見るたびに、大戰中にフランスの戰場で名もなく死んで行つた澤山の戦士の事を想ひ起すのが常である。

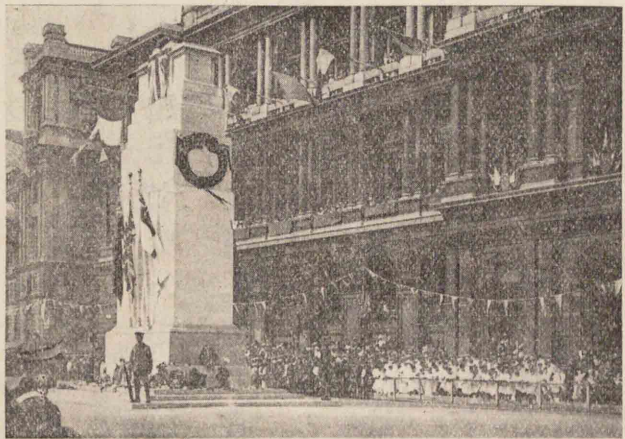
千九百二十二年十一月十一日、<sup>(1)</sup>ロンドンの<sup>(2)</sup>ホワイト・ホー

(1) London.  
(倫敦)  
(2) White Hall.

ふねはし

〔Canotaph〕

ルでセノタフの除幕式が行はれた。



〔Dover Strait〕

セノタフ

セノタフといふのは、千九百十四年から十八年までの歐洲大戦中に、故國の爲に遠征して、異郷で戦死した英國の無名戰士の爲に建てられた記念碑なのである。この日の前日、無名戰士の柩はフランスの戰場から送られて、英國驅逐艦でドーバー海峡を越えた。柩が英國の國土に著くと、十九發の禮砲が轟きわたつた。嚴肅な光景の裡に、この悲壯な戦

朝まだき

〔Victoria〕  
〔Hyde park〕  
ロンドン最大の世界的に有名な公園。

士等の柩がロンドンに向つた。

あくれば記念すべき平和條約調印と同月同日の十一月十一日、朝まだきの霧の中を、國民全體の悲しみに送られながら、柩は肅々としてビクトリアの停車場を出發した。ハイドパークでは勇者の最後を飾るべく、十九發の砲聲が次々に轟いた。

砲車に載せられた柩の上には、佛國の戰場で砲火を浴びて傷ついたまゝの英國軍旗が、覆ひ被されてあつた。陸海軍を始め、英國を代表する數千の人々によつて續かれた長い長い行列は、柩を守つて靜かな霧の街を進んで行つた。悲壯な軍樂隊の送葬曲は、道に群れてこの記念すべき行列を見

送る何十萬のロンドンの人の心に、消えやらぬ大戦の悲しき一面を思ひ出させて、涙を流さしめた。

静肅な行列は、新しく建てられて、まだ幕をつけたまゝのセノタフの前へ肅々と進んで行つた。其所には英國皇帝始め、<sup>(一)</sup>プリンス・オブ・ウェールズや、皇室のすべての人々が、頭を垂れて待受けてゐた。

柩を載せた砲車は、皇帝の前へ進み寄つた。その時<sup>(二)</sup>ウエストミンスター<sup>(三)</sup>の有名な大時計ビッグ・ベンが、緩やかに、しかも莊重に十一時の鐘を打つた。皇帝は幕をさつと除かれた。白い、高い、死と犠牲と忠勇とを象徴したセノタフが、すべての人の前に現れた。

Prince of Wales (イギリスの皇太子のこと。此所ではエドワード皇太子をいふ。)

Westminster

ロンドンなるテムズ河北岸の大寺院。

Big Ben

Canada (加奈陀)

續いて二分間、獨りロンドンだけでなく、全英國、それも本土ばかりではなく、印度も、濠洲も、<sup>(一)</sup>カナダも、全世界のあらゆる英領の國土では、すべての動く物がびたりと停止した。人も、電車も、汽車も、海上を行く船も、工場の機械も、すべての物がびたりと止つた。嚴肅な二分間、英人のすべては、一齊に、所を異にしながらか、静かに頭を垂れて、大戦で死んだ人々の生命と、その死によつて生残れる者が、いかに感謝し盡せぬ偉大な物を得る事が出来たかと思つた。

深刻な沈黙の二分間の後、柩は再びセノタフの前を通つて、静々とウエストミンスター寺院の方へ進んで行つた。柩のすぐ後には、皇帝が憂深く頭を垂れながら、歩いて行かれた。



哀悼

皇帝に續くプリンス・オブ・ウェールズも、皇族方も、内閣の大臣たちも、足は悲しげに重かつた。かうして無名戰士の柩は、全國民の哀悼の裡に、セノタフの除幕と共に、光榮あるウェストミンスター寺院に葬られた。

ウェストミンスター寺院に近く人々と共にその葬列を見送つてゐた私は、悲壯だつた當日の光景を、何時までも忘れ難い印象として、頭に深く焼附けられてしまつた。

無名にして戦死した人々のセノタフの表には、唯「光榮の死」といふ文字が認めてあるばかりである。けれどもセノタフは、光榮の記念でもなければ、華やかな榮譽の記念でもない。それは唯嚴肅な犠牲死の印である。譽も名もなくして、し

かも國の爲に、人の爲に、この上もない貴い死を遂げた勇者の犠牲の印である。私は功成り名遂げた人々の華やかな記念碑よりも、この清楚な、誰を記念したでもない無名な多數の戰士の碑の前に、心からの尊敬の頭を垂れる。

人類の歴史は、人類の文明は、進歩は、英雄の手によつて作られた物ではない。青史を繙けば、千載に名を遺す者は極めて少數の人だけである。けれども、人類はかうした少數の英雄よりも、忘れられて、名も朽ちて、空しく亡びた過去の累々たる無名の人々に感謝せねばならない。英雄によつて築かれた様に見える人類の進歩は、實は無名な人の力の集積に外ならないからである。

襟を正しうす

思索

今でも記念すべき十一月十一日には、英國では午前十一時から二分間、嚴肅な沈黙の靜思を續けてゐる。セノタフの前には、薰の高い白菊や秋の花の花輪が、**堆く**捧げられる。私はこの日がくる毎に、無名にして逝つた過去の人類に對する感謝と、さうした多數の人の犠牲死によつて築き上げられた今日の世界とを思つて、襟を正しうするのが常である。美しくて脆いけしの花。無名で逝つた人々。

私はそれからそれへとさまざまな**思索**に耽りながら、机上のけしの花を眺めやつた。さうして堪らない寂しさと、その寂しさの底から湧上る泉の様な大きな力とが、心の底まで浸みわたる様な思がした。

自修文

道は二つにしてまた一つ

幣(し)原はら坦たん

東洋道念の根本は誠の一字にある。西洋道念の根本は義務を盡すといふにある。西洋の教は相對的であり、東洋の教は絶對的であると言はねばならぬ。

凡そこの世の中に最も大きな望とは何であらう。總理大臣になつて國の政を左右する事であらうか。唯總理大臣になつただけでは、百年の後は愚か、二三十年も経つともはや世人の記憶からなくなつてしまふ。さうして見ると、永遠の生命を得ようといふ方が、更に大きな望である様にも思はれる。

然らば、それが最も大きな望であるかとよく考へるに、自分の生命を永遠ならしめようとするなどとは、やはり尙小我がたるに過ぎない。國の爲、社會の爲、人類の爲には、己のあらゆる者を

小我  
我慾や私情に  
とらはれてゐ  
る心。

(一) 歴史家、文學博士。大阪府の  
國大學長。臺北帝  
明治三年生。  
相對的  
物事の相互に  
關係を保つこ  
と。此所では、  
西洋の教は他  
との關係によ  
つてするの  
あり。東洋の  
教は他との關  
係がどうあら  
うとも爲すべ  
き事を爲すの  
意であるとの意

道は二つにしてまた一つ(自修文)

允

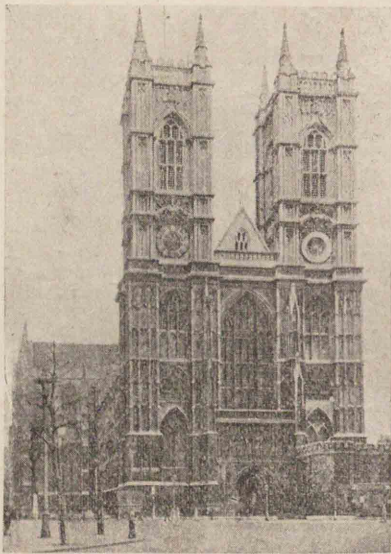
大我  
迷をはらつた  
とらはれない  
佛のこころ。  
(Paris)  
(巴里)

忘れる程の純潔な行爲が一層氣高いとして見れば、この行爲こそ寧ろ眞の大我ではなからうか。  
世界大戦が終つて、パリで觀兵式があつた時、大統領が戦死者の遺族に對して演説して言つた、我が國のあらゆる階級の人は、皆國の爲に努力してゐる。しかし、今此所に列席してゐる方々に先だつて死んだ人々の努力が、最も多大である。佛國は永くこの恩を忘れないであらう。聽いてゐる人は多く涙ぐんでゐた。  
大統領が勳功に隨つて書附を渡すうちに、四五歳の小兒が遺族の一人として大統領の前に出て來た時、大統領はこれを抱上げて、その頬に接吻しながら、「本當に君のお父様に感謝する。」と言ふと、滿場は皆すゝり泣の聲ばかりとなつた。  
かうなつてみると、西洋も東洋も道は一つになるのである。

○

觀光  
他國の土地の  
情況、人民の  
風俗などを視  
察すること。  
(Westminster  
Abbey,  
ウエストミン  
スター寺院の  
こと。)

(George V.  
現イギリス皇  
帝。西紀一八  
六五年生。)



イベア・ータスンミトスエウ

ロンドン觀光中にも、色々と感ずる事は多い。殊に戦後に出來た物を見ると、また新しい感想が加る。ウエストミンスター・アベイの中にある戦死者の墓の如きも、戦後に光彩を放つてゐる。

この墓は、歴代の王墓の中  
通りにあるが、その墓石に刻  
んである文句は、大體かう言  
ふのである。

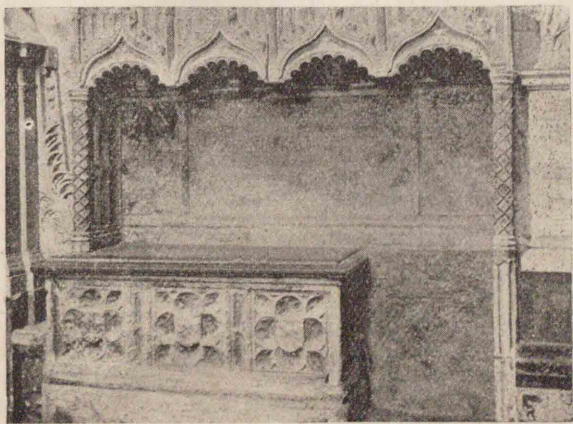
この石の下に、名も知れぬ  
英國の勇士の遺骸がある。こ  
れはフランスの戰場から後  
送されたもので、一九二〇年十一月休戦の日を以て此所に埋め  
られ、ジョージ五世陛下、國務大臣、主要將校及び國民の大衆がその  
葬式に參列した。大戦中、人力の限りを盡し、生命までも神の爲に、

道は二つにしてまた一つ(自修文)

國王及び祖國の爲に、郷里及び帝國の爲に、正義の爲に、世界の自由の爲に投出した人々を此所に奉祀する。

實によく英國魂を言表してある。

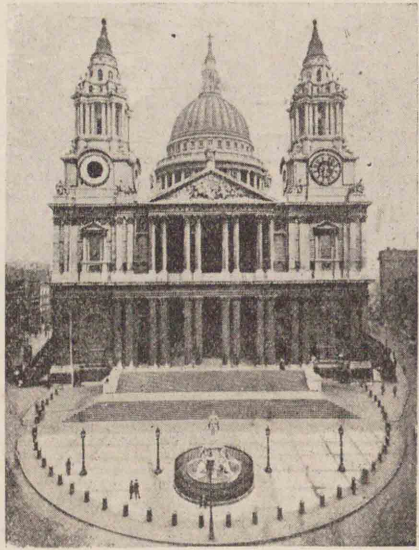
ウエストミンスター・アベイは、十三世紀の建築の標本であるばかりではなく、歴代の諸王や名家を葬つてあるので、一種の歴史的興味を人に與へる。歴代の諸王と言つても、ジョージ二世までであつて、この王以後は、<sup>(一)</sup> ウィンゾア城内に葬られる事となつた。名家としては、<sup>(二)</sup> 兩ピット、<sup>(三)</sup> フォックス、<sup>(四)</sup> グラッドストーン、<sup>(五)</sup> ビール、<sup>(六)</sup> カニングの様な政治家の墓があり、また<sup>(七)</sup> シェキスピヤ、<sup>(八)</sup> チョーサー、<sup>(九)</sup> テニスン、<sup>(一〇)</sup> チッケン



墓のーサー、チ

- (一) George II. (西紀一六八三年)
- (二) Windsor. テムズ河畔パークに於ける。十一世紀の築造。
- (三) Pitt. 老ピット (西紀一七〇八年) 小ピット (西紀一七七八年) の子。
- (四) Fox. (西紀一八〇六年)
- (五) Gladstone. (西紀一八〇九年)
- (六) Peel. (西紀一七八八年)
- (七) Caning. (西紀一八二七年)

の様な文豪の墓もあり、<sup>(一)</sup> ダーウィン、<sup>(二)</sup> ウェイス、<sup>(三)</sup> ニュートンの様な碩學の墓などもある。



ルーポ・トンセ

ウエストミンスター・アベイより新しいけれども、英國の最も有名な建築家クリストファー・レンが遺した最大寺院として知られてゐるのは、<sup>(一)</sup> セントポール寺である。これは英國の新教寺院の最初の物で、この寺院にもまた名家の墓が列なつてゐる。一々これを數へ立てる必要もないが、唯その中で注意すべきは、この寺院の建築者たるレンの墓や、<sup>(二)</sup> 繪畫に新機軸を出したターナーの墓や、<sup>(三)</sup> スターヴートン将軍の墓などで、更に最も立派なのは、<sup>(四)</sup> ネ

- (一) Shakespeare. (西紀一五六四年)
- (二) Chaucer. (西紀一三四〇年)
- (三) Tennyson. (西紀一八〇九年)
- (四) Dickens. (西紀一八〇二年)
- (五) Darwin. (西紀一八〇九年)
- (六) Wallace. (西紀一八三三年)
- (七) Newton. (西紀一六四二年)
- (八) Christopher Wren. (西紀一七三三年)

道は二つにしてまた一つ(自修文)

(St. Paul's Cathedral, London) の大會堂。西紀一七〇〇年竣工。新機軸を出す新しい方法を案出する。  
 (Turner) (西紀一七五一年) 西紀一八五一年  
 (Stokan) (西紀一八三三年) 西紀一八八五年  
 (Gordon) (西紀一八五一年) 西紀一八七五年  
 (Nelson) (西紀一七九一年) 西紀一八五二年  
 (Wellington) (西紀一八〇五年) 西紀一八七五年  
 (幣原坦著) 著者が歐米を漫遊した時の感想を書いたもの。大正十五年東京富士山房發行

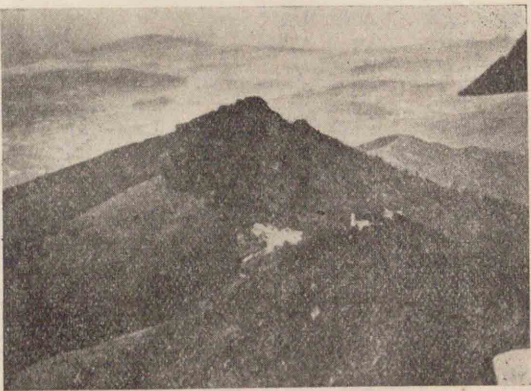
ルソンの墓と、<sup>(一)</sup>ウリントンの墓とである。ウリントンの葬式の時に用ひた柩車も、そのまゝに收めてある。  
 英國民が、祖國の爲に盡した先人を尊敬する事の厚いものには、感ずるに餘りがある。さうしてそれ等の先人が、同じ寺院の床の下に枕を並べて眠つてゐるかと思へば、<sup>(二)</sup>そゞろに無限の感慨に打たれる。  
 — 世界の變遷を見る —

### 一四 空の旅 その一

鈴木文史朗 <sup>(三)</sup>

芭蕉が奥の細道<sup>(四)</sup>をとぼくと、枯木の様な脚を運ばせたのは元祿の昔の事。昭和の我等は、お江戸から仙臺まで翁が三箇月かゝつた所を、僅かに二時間に縮めて飛んでしまはうとする。午前十時、サルムソン機<sup>(五)</sup>に跨がつて立川を舞上る。

(三) 新聞記者。名千明。葉縣の人。明治二十三年生。  
 (四) 元祿二年(一七二三年)九月、江戸を立上り、奥羽に遊び、九月伊勢に至つた。  
 (五) Sakimison。  
 (六) 東京府北多摩郡。陸軍飛行場。  
 (一) 茨城縣の南部にある我が國第四の大湖。周圍一五〇キロメートル。  
 (二) 茨城縣筑波郡。山頂は男體山。  
 (西) 女體山。  
 (東) 女體山の二峰に分れて、頂上を登山階、宮上王の御所、宮上王の御所、測候所、高山神社等がある。  
 (三) Stokan。



山波筑た見らか上機行飛

二十分経つか経たぬ間に、もう霞ヶ浦が光る。高度千二百メートル。眼の下に筑波山<sup>(二)</sup>が展開する。手前の峰が男體、絶頂に白く立つのは測候所、その右の屋根は筑波大神を祀る男體神社だ。向ふの高い峰が女體。海拔八百七十六メートルの名山も、飛行機からはかはい、丘に過ぎない。男體と女體とを繋ぐ谷間に小さく見える家は、ケーブルカー

の停留場だらう。

機は、關東平野の縁を縫つて散在する湖沼の上を掠めな

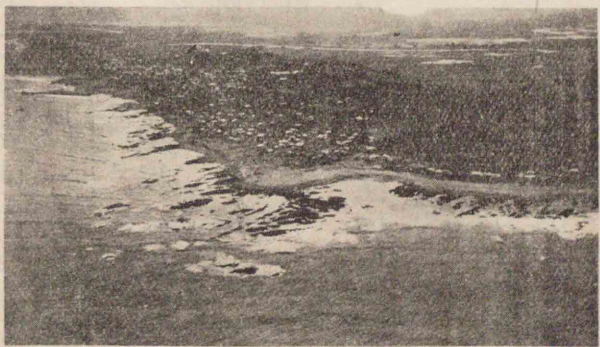
尻目にかけ  
る  
(一)千葉縣(下總國)銚子沖から茨城縣那珂沖に至る海岸

(二)茨城縣茨城郡磯濱町。避暑地として名高い。  
(三)大洗磯前神社。大洗岬にあり、大己貴命と少彥名命とを合祀する。國幣社。  
(四)茨城縣新治郡。

がら、霞ヶ浦を右下に尻目にかけて進んで行く。忽ち太平洋が見え出した。音に聞えた鹿島灘の荒波も、三百メートルの上から見ると、古い形容ではあるが、やはり青疊だ。

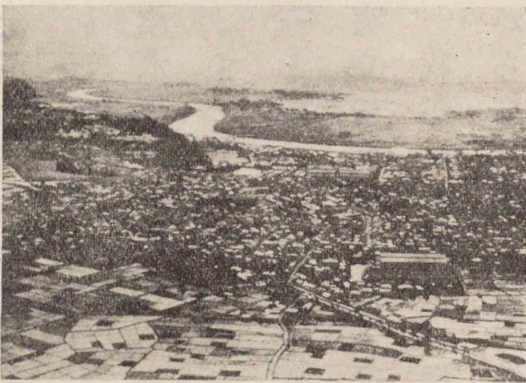
さしかゝつたのは、磯で名所は……。

(二)の大洗海岸。流石に(一)お定まりの海岸の松、大洗神社の森など、手に取る様に見える。波が白く、うねくした岸を洗ふ様の美しさ。大洗とはこれだと思ふ。筑波から汽車で土浦を經由してくれば二時間はかゝるが、飛行機では眞一文字に飛んでくるか



飛機上から見た大洗海岸

(一)茨城縣水戸市。  
(二)Schalk。  
(三)栃木縣の那珂川の下流。茨城縣に入り、那珂市をなす。水戸市を過ぎ、那珂平洋に注ぐ。



飛機上から見た水戸市

ら、たつた十分に過ぎない。このあたり一帯の海の景色は、前に島もなく、後に山もなく、唯豪壯な荒磯だ。

波の花散る大洗の上を過ぎて五分も経つたかと思ふと、もう水戸の上に来てゐる。(二)チヨークで緩やかなSの字を描いた様な那珂川が、機上からは先づ何よりも印象的に見える。それから水戸といふ市は長い町だ。川の最も幅広く見える所にある森が、老松古杉天を摩す

(一)水戸市の東部にある。

(二)茨城県東茨城郡。水戸市の西。常盤公園を屋上に受け

(比目魚、鯉)て風致がよい。

(比目魚、鯉)

(三)茨城県多賀郡銅を産する。

る水戸城址の丘。その附近に縣廳、裁判所、學校などの建物が、玩具の家の様に固まつてゐる。森の手前に、水を入れた一升(一) 枺(一)が光る。明星池だらう。左手に見える(二) 千波沼は、陸に上げられたひらめの様だ。その中をおたまじやくしの(三) 尻尾の様な放水路が通つてゐる。

さて、この次は日立鑛山へと機首(三)を向けると、例の、東洋第一といふ大煙突が、敷島一本を立てた程に、雲か霞の彼方に突立つて見える……。

我がサルムソン機はぐんぐん北進して行く。水戸の上空から三十分で日立鑛山の上に来てしまつた。巻煙草一本の大きさに見えた大煙突からは、白雲の様な煙が吐出されて

(一)阿武隈山脈一帯の形成する

高平原阿武隈山脈は東北地方の

方奥に北東部

から南東部を

な南部に北に

なり、南に北に

ル、南に北に

成る。山々の高

(二)茨城県多賀郡

豊浦町をいふ。

(三)多賀郡。茨城

福島兩縣の境

(四)源頼義、義家

が陸奥の豪族

安部頼時、貞

任九年を要して

討滅した。時

(五)義家が清原武

衡の家衛を討

つた。役、三

年を要した。

時、寛治元年

(一七四七年)

みる。青々とした阿武隈高原の起伏(一)に伴ふ陰影が、日本畫の波の様だ。

大煙突の下の谷にある横坑、縦坑、精鍊所に汗して働いてゐるであらう工人諸君に遙かに敬意を表

しつゝ、機首を右に立てなほして、もう一度海岸に出る。川尻、平潟の磯傳ひ

に茨城縣におさらばを告げる。

「勿來關はこの下あたりですか。操縦士の言ふ聲に下を見ても、これだけは見當がつかない。八幡太郎義家が飛

行機で出掛けたら前九年の役(四)と後三年の役(五)とはどうなつ



(一) 福島縣(磐城國)石城郡

(二) 兵庫縣(攝津國)神戸市の西端

(三) 兵庫縣(播磨國)明石市須磨・明石とも

(四) 石城郡・小名濱の東北にあつて、東方に突出する岬角

(五) 石城郡・小名濱の東北にあつて、東方に突出する岬角

(六) 福島縣(磐城國)雙葉郡

(七) 福島縣(磐城國)同縣相馬郡

(Felder)

(八) 同縣相馬郡

几帳面

ただらう。

勿來を過ぎて五分間で小名濱<sup>(一)</sup>の港、白砂青松を獨占してゐる須磨<sup>(二)</sup>や明石<sup>(三)</sup>も何のそのと言ひたいのは、このあたり一帯の青松ぶり、白砂ぶりである。空から見た灣の景色も全體に優しい。海は風が烈しいと見え、白波が痛快に岩にぶつつかつてゐる。左手に、あちら向きの黒牛と見えるのは鹽屋崎<sup>(四)</sup>。その上のサイダー瓶は、言はずと知れた燈臺。

機上から眺めたこのあたりの眞直な海岸線の雄大さは格別だ。久之濱<sup>(六)</sup>、富岡<sup>(七)</sup>、小高<sup>(八)</sup>、中村<sup>(九)</sup>……の町々が、物差の一寸づゝの切目の様に、同じ間隔で東北に續いてゐる。町の配置までが東北人の様に几帳面だ。

(一) 石城郡

(二) 村

(kilometre)  
(料)



飛行機上から見た平町

一五 空の旅 その二

機は小名濱港の上を掠めて、平町へ羽ばたき一つと飛んで行く。ふと左手を見ると、雲海の上遙かに阿武隈山系が、大きな水盤にふなを二三十尾入れた様に重り合つてゐる。ふなの背は皆干上つて赤くなつてゐる。そしてその先端から線香の煙がすう／＼と立つてゐる。常磐炭田だ。小名濱から十キロメートルを五分で平町の上空に出る。濱海道第一の町



(芥)

格納庫

も、空から見ると、こはれたざるの底に置かれたちつぽけな碁盤だ。實際、街區が小平安城よろしく整つてゐるのにはちよつと驚かされる。町の真中あたりにある馬蹄形の青い丘が、安藤氏の舊城址お城山。その附近に中學校、女學校、小學校が格納庫の様(註)に白く光つて見える。

おや、よく見ると、屋根の上に小さな目高がそつちこつちに泳いでゐる。私は操縦士に聞いた、

「あれは何です。」

「五月幟の鯉ですよ。」

「もう六月の中旬ぢやないですか。」

「この邊は一箇月半後れです。」

都から一時間半飛べば、東京の一箇月半前の鯉が、磬城の山間へ上つて來てゐるといふわけ……。

平町から我等の機は右にそれて、海岸傳ひにぐんぐん北進する。ふり返つて見ると、この海岸線は大工さんの墨線を張つた様に真直だ。

平から八十キロメートルをちやうど三十分で、原町(一)はらのまちの大無電塔の上(二)に來た。關東大震火災を一番早く海外に知らせ、磬城無電局を世界的にしたのはこれだ。成程大きい。地上六百六十フイットの白い竹の子の大怪物。それを繞つて火箸が澤山護衛兵然と立つてゐる。副柱ださうな。この大竹の子の下(三)のマッチ箱(四)の中からは、毎日一分間に百二十語から百五

(一)相馬郡。

(二)大正十二年九月一日關東大震火災。

(三)Kant.

(四)Emmich.

(San Francisco)  
(桑港)

十語の高速で、太平洋を一飛にサンフランシスコへ発信してゐるといふのだから、速いが自慢の飛行機も、此所だけではあんまり大きな顔——いや、翼はひろげられないといふもの。南の広い野原は、その名もゆかしい雲雀野原。此所の子雲雀どもは、母さん、今日は無電の上まで飛んだよと言ふさうな。

坂本、吉田などの町も瞬く間に過ぎ、もう仙臺まで一飛と海岸線と東北本線との間を飛して行く。下を見ると、上り下りの列車が、「おい、お互にゆつくりやらうよ」と、一緒になつてのたくつて行く。たつた一千メートルの上から離れて見ても、急行列車が徐行列車になるのだから情ない。

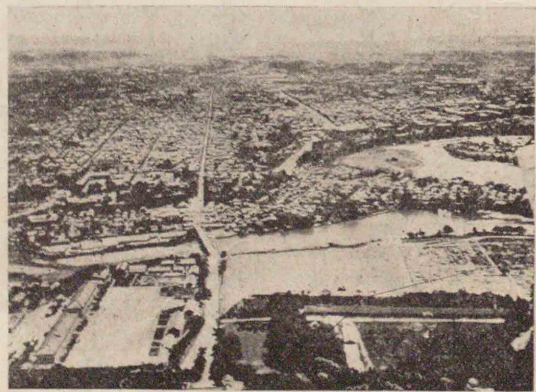
(三) 宮城縣亶理郡  
(四) 宮城縣仙臺市

(一) 福島縣(磐城國)旭嶽に發し、東流して白河を過ぎ、福島市の東方を東北に流れ、角田を過ぎ宮城縣荒濱の北方より長き二八〇キロメートルに入る。

書割

(二) 宮城縣名取郡

ふいと行く手を見おろして、眼は、飛んだ御馳走にありつく。南奥州の雄川阿武隈川が、陸前の谷間を悠々と流れ下る壯觀だ。羽前の國境や陸前の山々が左手に折重つて、自分たちが送り出した川の行く手を見て御座る。右手の川岸の木立や村落の工合が、芝居の書割そつくりだ。



市臺仙た見らか上機行飛

これが下り列車なら、阿武隈越せば岩沼町……だが、飛行機では、阿武隈越ゆれば仙臺だ。停車場の上から仙臺市を、北から西南へと一周する。この市も街

區が碁盤の目の様とまではいかなくても、眞直な竹竿でし切つた様に、きちんとしてゐるのに感心させられる。西へ廻つて、青葉城の上にやつて來て一望すると、仙臺はいゝ所だなあ。と思はず言ひたくなる。遙か彼方に霞と見える宮城野の原まで望んで氣のつく事は、煙突らしい物が一本も見えない事だ。森の都、學の都に加へて、無煙突の都を自慢するがいゝ。

右下の森は、これも仙臺人御自慢の青葉山の一部。その前の左右の白布は小練兵場。この二枚の白布で挟まれた道路の基點に立つお城の門が、盆景の門より小さい。この道路が眞一文字に大橋を渡つて、寒竹の釣竿の様に走つてゐる。大

(一)宮城縣の西境に發し、東流して仙臺市の南部を流れて、長取川に入る。名長四十七キ

橋の下を流れてゐるのが、青葉山と共に仙臺に色調を添へる廣瀨川。

時計を見ると午後一時十分。立川を出てから道草を食つたので三時間を過ぎた。飛行機は宮城野原の練兵場へ降り始めた。

— 空の旅地の旅 —

一六 親の慈愛

柳澤 淇園

一 五月雨

信貴の毘沙門堂に四季連歌の句合あり。その中に、五月雨に年中の雨降りつくし。といふ句あり。何がしの大納言聞し召されて、何者の申した

(二)奈良縣生駒郡平群村大字志高畑にあり。毘沙門堂は、その東半腹にある。

ゆかり

消息

るにか、この句の主を尋ぬべし。とありける時、高橋某そのゆかりある者に問ひて、かのあたりなる村長の申したる句なる由答へければ、わざ／＼御使の消息を賜ひて、京へも出づる事のあらんには、必ず参るべしとの事故、いと有難くて、かの村長わざ／＼京に出でて尋ねまゐらするに、さあらば逢ひて物語せん。とて、ひと間へ通し給ひければ、村長言ふ、風流の面目、雲の上までも聞えけん事こそ、いと有難けれと存じまゐらするなり。と言ふに、大納言も四方の話ありて、さて尋ね給ふは、年中の雨と言へる趣向の面白く覺ゆるからに、その句意を聞きたければ、逢ひ申したり。いかなる故事ありて、かく申せしぞ。とありければ、村長答へて言ふ様、別に故事と

非興

申すも候はず。唯五月雨の昨日も降り今日も降續けて、明日もまたかく降暮しなば、ひと年の雨もこの頃の五月雨に降盡しぬべしと思はれ候心より申したる外は、所存なく候なり。と申しければ、面白く覺ゆるなり。とて入り給ひぬ。村長が歸りし後、高橋出でて、いかなる御事ぞ。と尋ねまゐらせければ、大納言の仰には、さりとはは臈が思ひしとはたがへり。五月雨には四時の如く雨の様色々に降りける故、春雨の寂しきにくらべ、夏の夕立にたぐへ、秋の雨のもの、凄きにかこち、冬の雨の寒きにもたとへたり。この事古き物語にあれば、それを知りたる句にやとゆかしく尋ねけれども、さはなくて、雨の唯降盡すとのみ作りし事故、非興とは思ひぬ。と仰せら

○ 虚空

れき。

二 人の長たる者

紀州に豪富なる農家あり。田植の日、早少女凡そ二百五十人餘りも出づるに、その日の朝田植始る頃、近き山中にて大いなる鷲の犬と争ひけるが、終に犬をつかみて虚空へと飛上りたるを、他より一人駈け來りて、田植の長に言ひけるは、「あれを見られよ、鷲の犬を捕りて空に舞ひたり」と言へば、その長、詞をとめて、「さる事言ふべからず。今苗の植始めなり。衆人この事を知らば、皆大空を仰ぎ見るべし。さある時は、この苗二百五十束程のおこたりなり」とて、人には語らざりきとぞ。何事にても者の長たる人々、かゝる心掛はありたき事

にこそ。

三 世渡る業

木曾の山中など深山幽谷にて岩茸を採るには、ふごといふ物を造りて、綱を附けて、夫はそれに入りて、その妻樹々の枝より下げて、つりおろし引上げなどして谷間をあさるとぞ。下は幾丈とも限り知れざる所なる由、見し人物語れり。若し過ちて、綱の切れて落ちたらんには、命なかるべし。また伊勢の海にて海士のあはび採るには、乳呑兒など引きつれて、夫はかいを使ひゐて舟もやひするに、妻は海底に飛入り、此所彼所貝をもとむるうちに、兒の乳を尋ねてよゝと泣く聲の水底に聞ゆるにぞ、今一つ得まく思へど、兒の泣く聲の

○ (畚)

(腹、鮑、蛸)

(舫)

惻隱の心  
すぎはひ

聞ゆるにひかさされ、浮び出でて舟べりに取付き、息もつきあへず、兒に乳を添ふる有様哀にして、實に惻隱の心も起りぬべし。世渡る業さまざまなる中にかゝるすぎはひする輩もあるものを、家にありてその日を樂に過しつる身は、いと有難き事にあらずや。

四 親の慈愛

余はいとけなき頃より詩歌の道を好み、偶、作文などせしをりから、稿成りて父に見するに、一つとして賞められたる事なく、唯、無益の事なり。とて座右に投捨て置かれ、他の者は、見て賞め給へば、さりとはいかゞとのみ思ひ過し、が、後に妻に迎へたる女の、物縫ふ事の人に勝れて、小袖など一

ひたぶるに

水仕のわざ

日に二襲づ、縫ひて、餘事までも事缺かねば、物縫ふ職人の見ては驚くばかりに上手なりけり。余或時物縫ふをひたぶるに愛で賞しけるを、妻の言ふ、「三歳にして母に後れ、繼母に育てられしが、いと厳しき性質にて、五六歳より水仕のわざをつとめ、七歳より手習、物讀、裁縫を教へられ、實の子ならねば、教訓足らじと末に至りて、譏られんは口惜し。」とて、羽根つく遊だにえせで、唯物縫ふ事などのみに違なかりつれば、をりからははげしき母よと思ひしかども、今となりては物縫ふ業を人に賞めらるゝは、偏に繼母のなさけ薄からざる慈愛なり」と言へるを聞きて、余がいとけなき頃の作文を賞められざりし事の、いと有難きを思ひ合せぬ。——雲萍雜志——

(一)京都市右京區。

一七 蛙物語

昔太秦(一)のほとりの池の蛙ども多く集れる中に、大きな蛙の跳出でて言へる様、我々、歌といひ軍といひ、文武二道を汚し、仙術にも通ぜる身の、泥龜づれと同じ様に、四足を以てはひまはれる事穩かならず、されど、天性四足と生れつきたる身の、自身の力として、はかなひ難かるべし。いかにもして、此所の薬師如來に大願を掛けまゐらせ、二足をもて歩き、二つの手をもて用事をかなへ、萬蟲の至尊となりて、たとひ蛇などの追ひくとも一足も退かず、手をもて防ぐ様なりたきものなり。と言へば、皆々、然るべし。と同じけるに、その中に一

(叶)

同す

布施  
作善

參籠す

(一)「これやこの行くもかへるも別れては、知るも知らぬも、(後撰集、蟬丸)」  
進退谷る  
(二)俳人、戯作者、伊勢の人。寛文三十二年(一七二二年)歿。年四十二。

つの蛙進み出でて、佛陀その報恩の禮儀を待つとしもなけれども、若しその願かなひなば、何をか布施に致すべき。作善なくて如何と申しければ、これこそ誠に言はれたれ。とて、或は「水草の花を奉らん」と言ひ、或は「沙を塔と組みて佛を供養せん」と言へるも口々なりけり。皆々この議に傾きて、一心に大願を起し、一七日參籠しければ、七日満ずる明方に、多くの蛙二足をもて立ちにけり。いかばかりか自由なるべきと悦びしに、思の外に兩眼後の方になりしかば、行くべき方には眼なく、眼ある方へは足進まず。これやこの行くもかへるの進退此所に谷りければ、また色々祈願しなほし、やうく昔の身になりけりとかや。

(三)山岡元隣の文に據る

(一) 詩人。宮城縣  
の。明治二  
十三年生。

一八 河 鹿

白鳥省吾<sup>(一)</sup>

月の出てゐる晩、  
河鹿の啼く笛のやうな音が、  
溪流をつらぬいて聞える。  
湯氣のやうに柔かい、温い、  
そして孤獨きはまるものだ。

(二) 伊豆半島の中  
央より少し東  
にかたよる。

天城<sup>(二)</sup>の山裾の谷間は黒くおぼろに、  
大きな石の上に碎けて流れる水に、  
月の光がきら／＼と映つて、  
暗さとかゞやきとの調和のよさ。

(一) 詩人。名は淳  
介。岡山縣の  
人。明治十五  
年生。

一九 落梅の音

薄田泣菫<sup>(一)</sup>

こんな深山で、  
自分の唄を歌つてゐる河鹿。  
かうした河鹿の音を聞けば、  
いつたい孤獨の寂しさなんといふものは、  
この世にあり得ないやうに思へる。

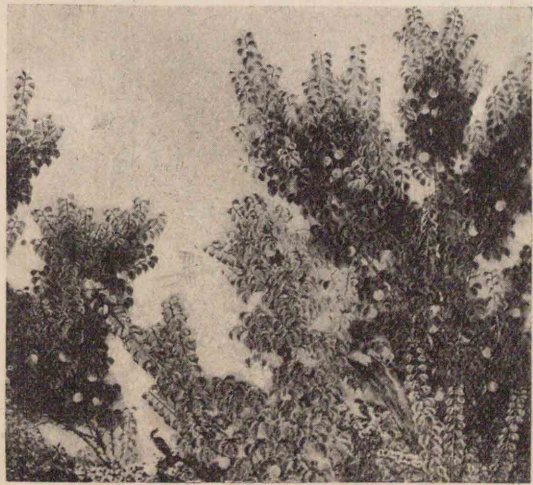
今年は梅雨前には、雨がひつきりなく降續いたが、肝腎の  
梅雨に入つてからは毎日の好天氣で、自分の住つてゐる近  
くの水田なども、水不足で田植が延びがちになり、宵毎に聞  
く蛙の聲も、何となく力がなかつたが、六月も末になつてか



土砂降

ら雨は降出した。

初はしとくくと降出した雨が、やがて底を抜いた様な土砂降となり、それが二日も三日も四日も五日も、どうかすると九日も十日も降續くと、天地は雨の光と影と響とに壓倒されて、草も木も、鳥も獸も、野も山も、また人間もまるで小さな魚の様、に押流されてしまひさうな、危つかしい氣持を抱かせられる。この危つかしさを孕んでゐるのが梅雨の雨の特徴で、芭



(筆廣宗柴) 頃の雨梅

蕉の

さみだれを集めて早し最上川<sup>(一)</sup>。

といふ句を讀んで、岸を浸さんばかりの濁水が、矢の様に早く走つてゐるのを想像して、眼がまひさうになるまでに水の力に驚くのも、この危さの氣持を感じるからである。燕村<sup>(二)</sup>の

さみだれや大河を前に家二軒。

も、またこの危さの美を外にしては味ははれぬ句である。何時の年でも梅雨に入つて、土砂降の大雨に不安な危つかしさを抱かせられる度毎に、私は喩へ難い一種の快感を覺えぬわけにはゆかない。

(一) 山形縣の南境、吾妻山に發し、吾妻川に至り、酒田港に入る。長さ一六キロメートル。  
 (二) 江戸時代の俳人、畫家、攝津國(大阪府)東成郡馬場村の人。姓は馬場、名は東成、字は口、号は天明、三十八年(一八二八年)歿。

(一)江戸時代の俳人。芭蕉の高弟。加賀の人。

幾日か降續いた雨が、やがて降りくたびれた頃には、凡<sup>(一)</sup>兆の言ふ

この頃は小粒になりぬ五月雨。

で、長雨と大雨との憂鬱と不安とから救ひ出された、激情の後のぐつたりした疲から産れる明るさと言つた様なものが、分毎に、秒毎に度を加へてくるのも、かうした時である。

また降續き降暮した雨が、何時か夜になつて人の寢靜まつた後にこつそり晴れて、それがちやうど月のある頃で、庭木の影が水の様に窓障子に浮んでゐるのを、ふと眼が覺めて見る驚なども、梅雨でなくては得られない趣である。

月のない全くの闇の一夜、夜が更けて寢つかれないでゐ

(半)

ると、さき方から降りほそつた雨は何時しか止んで、草木といふ草木は、しづくの垂れるぬれ髪を地べたに突伏したまま、起上る力もなく、へとくになつてゐる靜かさの底で、ほたりと何物か地べたに落ちるのを聞附ける事がよくある。熟梅<sup>うめ</sup>の一つが枝を離れた音である。

私はどんな時でもこの音を聞附けると、梅の實が自分の心の深みに落ちて來たかの様な、驚と懐かしみとを感ずる。何一つ動かない閑寂その物の微な溜息が、樹の枝を離れて、眞直に私の生命の波心にさゝやきに來た様な感じである。

―草木蟲魚―

(一)小説家。名は録彌。群馬縣の。昭和五年歿。年六十。  
 (二)滋賀縣犬上郡井伊氏の舊城下。樂々園はもと井伊氏の庭園であつたが、今は公園となつた。  
 (真孤)

## 二〇 湖のほとり

田山花袋<sup>(一)</sup>

彦根の樂々園に来て、水郷らしい感じを味はつた。もう日暮に近かつた。それに雨さへ降出して來た。まこもや蘆の茂つた向ふには、湖の入江が廣々と寂しく、且寂びて横たはつてゐて、行々子の聲と蛙の聲とが、湧く様に聞えた。

「いゝな」

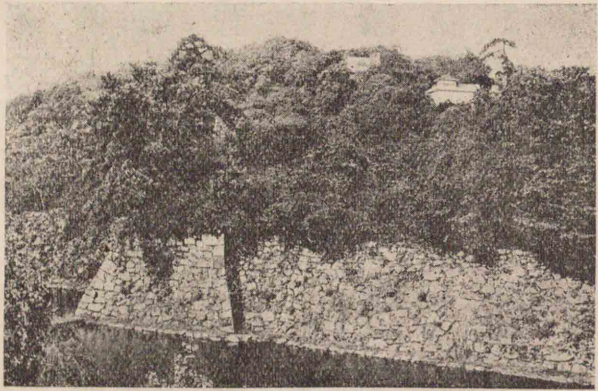
かう私は獨りで言つて、一日船に車に乗疲れた體を、縁側の所に持つて行つた。私はかういふ町が此所に残つてゐるようとは思はなかつた。封建時代そのまゝになつてゐる城址の天守閣、昔と少しも變らない大きな鬱蒼とした樹木、その

(蘭)

(一)藤原氏の出。井伊直政(家康の臣)彦根に築城。直弼に至つて三十五萬石を領した。今は伯爵。

(二)筆者田山花袋は群馬縣館林(秋元氏の舊城下)で生れた。

脈々として

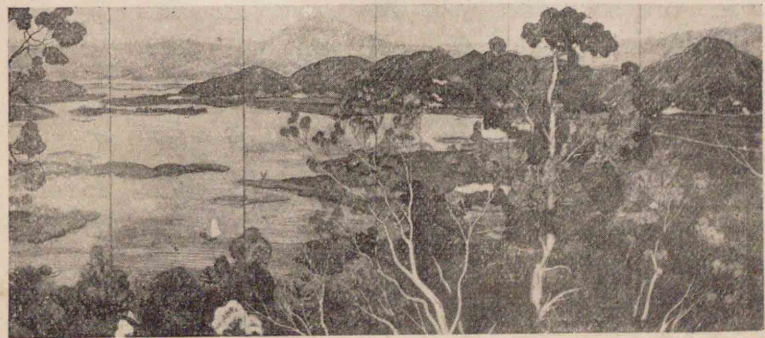


彦根城

間にをりく、見える城樓の白壁、それを取卷いた濠にまこもや、みや、蘆の叢生してゐる様も、私に詩を思はせた。井伊家の別邸に行く車の上で、年を経て蘆の葉茂り水草生ひ、蛙ほたるの濠となりにきといふ歌を詠んだが、かうした城下町に生立つた身の、色々幼時の事が思ひ出されて、父母や祖父母の事など、脈々として面影に迫つてくるのであつた。五十年も六十年も世に後れたかと思はれる様な寂しい懐かしい町。其所に住む人たち

(一)滋賀縣大津市琵琶湖畔にあつて京都に近い。  
 (二)同縣坂田郡湖の東北岸。  
 (三)彦根の東の岡石田三成の佐和山城のあつた所。  
 對象  
 成敗

の生活なども思ひやられて、大津、長濱あたりの明るい繪の様な町と、對象をなしてゐる事を思つた。それにその城址の佐和山と相對してゐる形が、私に昔の英雄たちの成敗の跡をしのばせた。しかし、若しこれが薄暮でなかつたならば、また空氣が雨意を帯びてしつとりと重くなつてゐなかつたならば、また城址の中が荒涼として寂しさに閉されてゐなかつたならば、或は彦根の町その物に對しても、これ程の印象

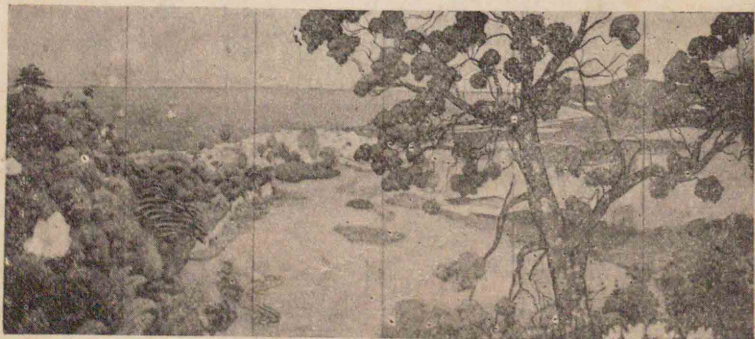


(筆村遙田池) 望展城根彦

色濃くする

を受けなかつたかも知れない。それに一日の遊に疲れ果てた私の心と體とが、更にそれを色濃くしたのであらう。私のに當てられた樂々園の一間が、奥の閑雅な一室であつた事も、限りなく私の心を落著かせた。行々子は頻りに鳴く。雨が絲の様に細く降りしきる中を、蓑笠をつけて船を漕いでゐる漁師たちも、昔の古い繪そのまゝであつた。

「いゝな。」



(筆村遙田池) 望展城根彦

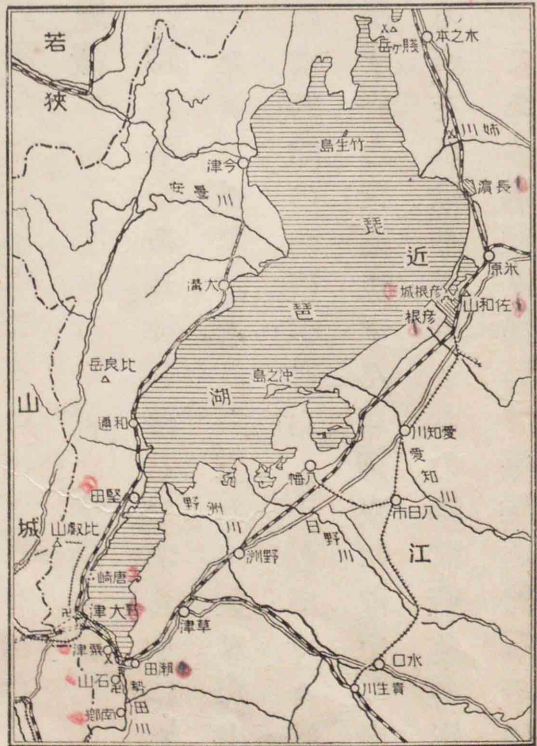
(一)オランダ語の  
pikの訛。  
(二)瀬田(勢多)の  
唐橋。近江八  
景の一。  
(三)瀬田川に面し  
石山より少し  
下流。堰を設  
けて水量を加  
減する。  
(四)京都府(山城  
國)宇治郡宇  
治村及び久世  
郡宇治町邊一  
帯の稱。  
(五)滋賀郡。古寺  
石山寺がある。  
近江八景の一。  
(六)石山と膳所と  
の間の湖畔の  
松原。近江八  
景の一。  
(七)滋賀縣。浮御  
堂の落雁を以  
て名高い。近  
江八景の一。

曾遊の地

かう私は繰返して言つた。  
私は昨日から一周した琵琶湖のさまゝな光景を頭に繰返した。白いペンキ塗の瀟洒たる遊覽汽船昔のまゝの瀬田の長橋南郷の洗堰ではこれから宇治に出て行く山中にある溪流の音と、村落の平和とを思つた。石山、粟津すべて曾遊の地ではあつたけれども、皆それ〴〵に私の興を引いた。小舟に乗つてしゞみをすくつてゐる漁師たちの姿も珍しかつた。それから私たちは湖の西岸に渡つた。思ひ出すのも容易でない様な色々な光景。とてもこれだけをかう短時間に自分で廻つて見る事はむづかしいと思つた。しかし、何と言つても、琵琶湖の美は堅田以北にあつた。普

膾炙する

通に八景と言はれる所は、餘りに人口に膾炙し過ぎた爲か、それともたびたび來て見て知つてゐる爲か、或は實際湖が衰へてしまつた爲か、私の心を動かす様な新しさと鮮かさとを持つてゐなかつた。しかし、年來琵琶湖をさういゝと思つてゐなかつた私も、かうぐるりと巡遊して見ると、流石に心を動かさずにはゐられなかつ



一) 滋賀郡。大津の西。近江八景の一。

た。水も深かつた。随つてその色も、大津や唐崎あたりで見た様なものではなかつた。飽くまで自然の懷に身を抱かれた様な氣がした。

—湖のほとり—

(二) 物理學者、理學博士。本名は寺田寅彦。高知縣の人。明治十一年生。

二一 野薔薇

(三) 吉村冬彦

夏の山路を旅した時の事である。峠を越してから急に風が絶えて、蒸暑くなつた。狭い谷間に沿うて段々に並んだ山田の縁を縫ふ小徑には、蜻蛉の羽根がきら／＼して、時々蛇が行く手からはひ出す。谷を覆ふ黒ずんだ蒼空には、をりをり白雲が通り過ぎるが、それは唯あちこちの峰に藍色の影を引いて通るばかりである。咽喉が渴いて堪難い。路端の田

の縁に小溝が流れてゐるが、金氣を帯びた水の面は、蒼い皮を張つて、鈍い光を照返してゐる。行くうちに、片側の茂みの奥から、小徑を横切つて田に落ちる清水の流を見つけた時には、わけもなく嬉しかつた。

(檜)

すぐに草鞋のまゝ足を浸したら、涼しさが身に浸みた。路の傍に少し分入ると、此所だけは特別に、かしや、ならが、こんもりと茂つてゐる。苔は濕つて、蟹がはつてゐる。崖から浸出る水は美しい。羊齒の葉末から滴つて、下の岩の窪みに溜り、餘つた水は溢れて、苔の下を潛つて流れる。小さな竹柄杓が浮いたまゝに、しづくに打たれてゐる。自分は柄杓にかじりつく様にして、旨い、冷い、腸に浸みる水を味はつた。

けはひ

少し離れた崖の下に、一株の大きな野薔薇があつて、純白な花が咲亂れてゐる。自分は近寄つて強い薫を嗅いで、小さな枝を折取つた。人のけはひがするので、ふと見ると、今までちつとも気がつかなくなつたが、茂みの蔭に柴刈の女が一人休んでゐた。脊負つた柴を崖にもたせて、脚絆の足を投出したまゝ、じつとこちらを見てゐた。

餘り思ひがけもなかつたので、驚いて見返した。つぎはぎの著物は裾みじかで、繩の帯を締めてゐる。白い手拭を眉深に被つた下から、黒髪が額に垂掛つてゐる。都では見る事の出来ない健全な顔色は、少し日に焼けて、一層美しい。人に臆せぬ黒い瞳でまともに見られた時、自分は何だか咎められ



野薔薇 酒井白邊筆

た様な気がした。思はず御辭儀を一つして、其所を去つた。

研ぎすます

蟬が鳴いて、蒸暑い事は一層烈しい。今折つて來た野薔薇を嗅ぎながら二三町行くと、向ふから柴を負つた若者が一人上つて來た。身の丈に餘る柴を脊負つて、のそく歩いて來た。逞しい赤黒い顔に鉢巻をきつく締めて、腰には研ぎすました鎌が光つてゐる。行違ふ時に、「どうも御邪魔様で」と言つて、自分の顔をちらと見た。暫くしてふり返つて見たら、若者はもう清水の邊近く登つてゐたが、向ふでもふり返つてこちらを見た。自分は何といふわけもなしに、手に持つてゐた野薔薇をもう一度嗅いだ。

— 藪柑子集 —



(一) 歌人。本名久保田俊彦。長野縣の人。大正十五年歿。  
 (二) 長野縣諏訪郡下諏訪町高木

白修文

金魚賣

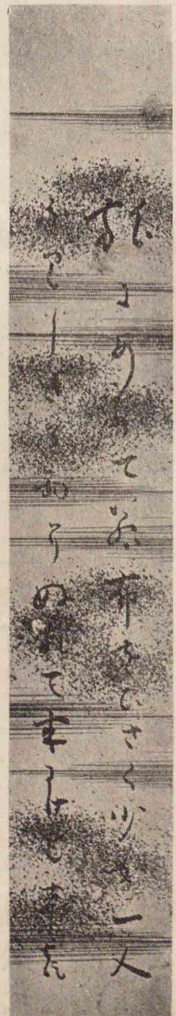
鳥木赤彦<sup>(一)</sup>

金魚賣の呼聲が聞えると、あゝ、夏が来たといふ感がする。私の居村は信州の山中だから、金魚賣のくる頃は、くぬぎ林も芽ぶかず、庭さきの柿も芽ぶかず、櫻の葉が稍伸びて、散残りの蓐がまだ残つてゐて、晴れた朝は桑畑や庭に霜が見え、家の中にはこたつがあり、春といへば春、夏といへば夏ともいはれ、それで冬の風情も幾分残つてゐるといふ頃である。さういふ山村へ金魚賣の呼聲が訪れてくるので、その聲を聞くと、夏の心が先づ定まつて、やがて清涼の氣動くといふ感がするのである。金魚賣の笠は白くて大きい。それ程の大きさの残雪は、村近い山の上にも、ちらほら見えてゐる。村の木立は流石に多く芽を吹いてゐる。その中を金魚賣は聲を張上げながら、靜かに歩いて行く。その聲がすると、田

清涼の氣動く  
 初夏の清新な  
 涼氣が湧起る  
 それ程  
 金魚賣の笠を  
 さす

女の身そらで  
 女の身であり  
 ながら  
 旅にありて  
 若布をひさ  
 しく少女一人  
 ふりしきる  
 雨にぬれて  
 來にけりて  
 赤彦

しをらしい  
 可憐である  
 いちらしい  
 いたらしい  
 (一) まめがきとも  
 いふ。柿の一  
 種で、實は六  
 七分。よく熟  
 したものは食  
 用となり、未  
 熟のものから  
 は澁をとる。



鳥木赤彦筆蹟

舎の村落が餘計にひつそりと落著くのである。金魚賣に續いてくるのは若布賣である。それは多く越後の女であつて、赤いたすきに紺の脚絆を穿いて、遙々信州路にやつてくる。信州ばかりではない、甲州から關東までも渡つて歩くと聞いてゐる。女の身そらで旅から旅を渡り歩くのは、燕の渡り歩くのよりもしをらしい。金魚賣も、若布賣も、大抵美しい聲を持つてゐて、新緑の山家に清爽な風味を添へるに十分である。私の村外れに石割工事があつた。その割石の上で、二人の若布賣が辨當をつかつてゐた。其所には山から湧出たばかりの清水が流れて居り、信濃柿の老木が一本立つて、いさゝかの蔭をなしてゐた。

金魚賣(自修文)

(一)文學者。名は  
の芳衛。高知市  
十四年歿。大正十  
七年歿。年五十

二二 山嶽の日本

大町 桂 月

英國も鳥山の國なるが、英國の山はすべて千五百メート  
ル以下なり。我が國には三千メートル以上の山嶽、富士山を  
始めとして二三十座あり、二千五六百メートルの山嶽は百  
座を下らず、千五六百メートルの山嶽は一々數ふるに違あ  
らず。山嶽の爲に土地を狭められたりとは、誤つて横より勘  
定したるなり。山嶽には皺曲多くして、山嶽あるが爲に、日本  
の面積は鳥瞰の面積に數倍するなり。日本國民は米を食ふ  
人種なるが、その米を得るは山の恩なり。山あるを以て川あ  
り。川あるを以て水田あり。水田あるを以て米あるなり。

座

鳥瞰

(一)青森縣上北郡  
十和田山上に  
ある。  
(二)栃木縣日光山  
中の男體山麓  
にある。

活火、休火、何れの火山も支那になく、朝鮮にもなくして、東  
洋にては日本のみにあり。富士山を始めとし、日本の名山に  
は火山多きなり。火山あるにつきて山湖生ず。<sup>(一)</sup>十和田湖、中禪  
寺湖、蘆湖と數へ立つれば、一百を下らざるべし。琵琶湖は偉  
大なれども平湖なり。平湖は濁り、山湖は澄む。平湖は下界と  
連なれるが、山湖は山に圍まれたる仙境なり。夏涼しくして  
蚊も居らず。風聲雲色、草木禽獸すべて下界の比にあらざる  
なり。唯山湖は富士以北に集れり。且山上僻遠の地にあるを  
以て、普通の旅客の目に觸れず。世上大多數の人は、未だ山湖  
の美を知らざるなり。山異なるにつれて、頂上も色々に變化  
す。下界より眺めたるのみにては、想像の及ぶべくもあらざ

るなり。

平地ならば、北すること數百里にして見る草木風色を、山嶽ならば登ること數里にしてこれを見る。造化は一種の縮地術を山嶽に行へり。瘠土に生長する赤松の森林何時しか盡きて、ふな帯となり、かば帯となり、終にはひ松帯となりて樹木盡き、その上にはお花畑の奇花異草、平地にては見られざる鮮麗の色を帯びて、これも平地にては見られざる星の光と映發す。山高ければ高き程空氣清らかになりて、紫外線直射す。それ故に高山植物の花の色は美なるなり。願はくは、高山植物の花をして、とこしなへに天上にあらしめよ。下界に移さば、或は枯れずとも、高山の上にて見る如き色澤は得

(樺、山毛櫸)  
(樺)  
(偃松)  
お花畑

映發す

られざるべし。

山嶽に登れば平地にて見られざる樹木多く、塵を帯びずして生色あり。雲にぼかされて幽趣あり。巖に生ひて奇姿を呈す。松も黒松、赤松は平地にても見らるゝが、山に入りて姫小松を見る。この樹は他の樹木の生え難き所に生ゆ。巖と巖との間に寸土を求むるにあらざ、その根よく巖を穿つなり。根に苦勞するを以て、その葉小なり。その葉小なるを以て、姫小松の稱あり。楓も巖に生ず。滿山皆花といふ光景は、實際には見られざるが、滿山皆錦繡といふ光景は、關東以北到る所の霜葉に見る。登りくはひ松を踏むに至れば、ほつと一息つく。樹木盡くると共に、頂上遠からざるなり。はひ松を越

生色

山靜かに似たり  
太古に似たり

えてお花畑に入れば、この世ながらの神苑なり。はひ松を踏みてお花畑に入りたる者にして、始めて高山に登りたりと言ふべく、花の眞の美を味はひたりと言ふべきなり。

山靜かにして太古に似たる所、幽禽の和鳴を聽けば、仙樂を聽く心地す。下界にては春にのみ聞かざる、鶯の聲を、山上にては夏も尙聞かざる。下界にては、杜鵑啼く時には鶯は啼かざるものなるが、山上にては鶯と杜鵑と合奏す。駒鳥最も早く起きて啼き、嶽雀お花畑に仙趣を添ふ。はひ松の絶間に雷鳥の子をつれて歩く様は、世にも可憐なるかな。

平地の水は、海の怒濤巖を打ち、川の細波岸を嘗むるくらゐの事なるが、山嶽に入れば水の様千變し、水の音萬化す。山

名にし負ふ

(一)江原道。大白  
山系に屬し、  
花崗岩から成  
る奇石怪岩を  
以て名高い。



(筆泉敬井玉) 鳥雷の畑花お

中の水はすべて清きが、或は飛び、或は落ち、或は激し、或は散り、或は懸り、或は垂れ、或は躍りて、怒るあり、叫ぶあり、泣くあり、笑ふあり、歌ふあり。單に瀑布を以てするも、直下するあり、巖を傳ふあり、急斜面に激動するあり。溪ありて山益、幽に、瀑布ありて溪益、奇なり。奇巖怪石は海邊にも見らるゝが、山に多し。名にし負ふ槍嶽の槍も、連山の上に傑出せるを以て、その價值あるなり。妙義、耶馬、朝鮮の金剛山などの奇巖怪石雲

上に重疊する趣は、山ならでは見られざるなり。  
平地にても雲煙は見らるゝが、その妙を極むるは山嶽に  
あり。白雲馬頭に生ずるも山なり。脚下に雷鳴を聞くも山な  
り。下界海となり峰尖島となる雲海の壯觀も、山ならでは得  
られざるなり。

日出、日没の美は海邊にても得らるゝが、高山より見れば  
尙一層美なり。雲海の底より日輪の躍出する有様、世にも崇  
高の美を極む。唯これ天照大神、天の岩戸を出で給ひて、天地  
忽ち明るくなりたるも、かくやと思はるゝばかりなり。

—近年の我輩—

(一) 詩人、洋畫家。  
千葉縣の人。  
明治三十一年  
生。

二二三 大洋の岸邊にて

わたしの健康は

太陽から、

太陽の下のあらゆる自然から

わたしに來た。

海、

輝きあふれる太陽に浸された海。

眞青な海は

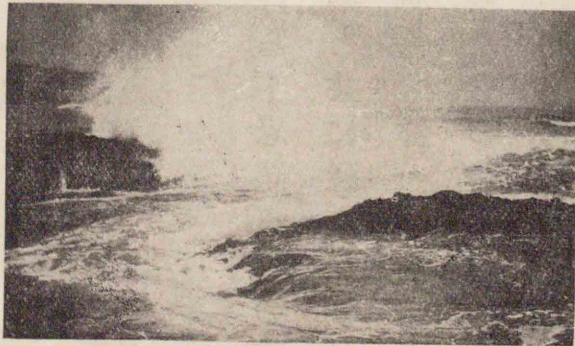
私の身體を鳶色に染めた。

おゝ、健康よ。自由よ。

海洋の風は

私の肺臟を一杯にふくれあがらせる。

おゝ、洋々と遙かに見わたす宇宙の眺。



大洋の岸邊

(一) 宮崎 丈二

わたしはこの大洋の岸邊の一角に立つて、  
わたしの限りなき自由な魂を放つ。

— 爽かな空 —

### 二四 新しい都市 その一

一

(一) 明暦三年(二) 正月三日江戸大火  
(二) 安政二年(二) 五月五日江戸大火  
(三) 安政二年(二) 五月五日江戸大火  
地震の江戸の大

[Phoenix]

エジプトの古い傳説に、不死鳥といふ不思議な鳥の事が語られる。それは五百年に一度、自ら巢と共に猛火に焼けて、まだ熱い灰燼の中から、若く美しく、羽色も鮮かな鳥となつて蘇るといふのである。何代かの前、私たちの祖先が武藏野の草莽の中から江戸を作つて、それが明暦の火事で焼け安政の地震で壊れ、その上、江戸が東京になつて、武家時代の城

下町の素地に、強ひて歐米の近代都市らしい外觀を装はせた。それが大正十二年九月一日、あの空前の大震火災の禍を受けて、唯半日のうちにその大半を地上から奪ひ去られた。五十億といひ、また六十億ともいふ物質上の計數はともかく、江戸時代二百八十年、明治大正時代五十餘年、三百三十餘年間にわたる人間の努力の集積が、一朝にして失はれた事を思ふと、實にこの損失はいかなる數量でも正しく言表す事は出来ない。しかもそれだけの打撃を受けながら、我が東江市はまだほとぼりの残る灰の中から、それこそ昔話の靈鳥の様に、見事に美しく羽づくろひして立上つた。大正十二年九月十二日帝都復興の詔敕を拜してから、昭和五年三月

ほとぼり  
羽づくろひ

二十一日車駕親臨、復興完成の式典を擧げられるまで僅かに六年半、この世界の最新様式を具へた近代都市は、石瓦の外に何一つ残らない焦土の上に、春を待つて草が芽ぐむ様に、忽然として出現したのである。世界の人が目をみはつたのも無理はない。明曆から安政、安政から大正と、その間百年または二百年を隔てて、何時もこの不死鳥は猛火の中から再生して來たのである。

二

都を作る話。それは古い歴史の本で讀む通りを、私たちはこの七年の間、毎日目の前に見て來た。焼爛れた灰を掻き石を除いて、土を平にした上に、くひを打ち柱を建てる。崖を崩

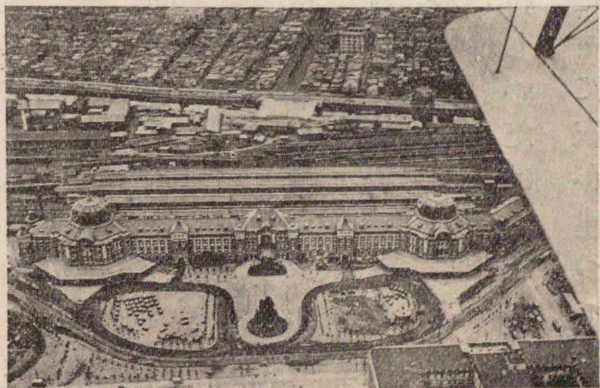
(杣)

(concrete)  
(混成土)

し濠を埋めて、新しい道を造る。晝となく夜となく日に何萬人。これを七年の時間に延べたら、何億に當るかも知れない偉大な勞力が動かされ、これを金にして國家の支出だけでも五億七千萬圓、全體にしては十億圓にも上る、夥しい額の支拂はれた結果が、今日の新しい東京である。其所にはもはや江戸もなく、以前の東京もない。鐵材、石材、木材、コンクリートと、材料にこそ相違はあれ、見わたす限り平たい洋風陸屋根造の四角な立體を並べて、全く歐米化された新しい都市風景が出來上つた。建物と樹木との新しいだけでなく、道もなかつた所に道が出來、家のなかつた所に家が建つて、地形も著しく變へられた。千古に變らぬ緑のお濠と、隅田川の黒

い流との外に、七年前の東京の記憶を、今の東京の何所に求めてよいか、旅人でない者でも迷はずにはゐられない。

一層變つたのは其所に動く生活である。東京市の大玄關である東京驛。其所の赤煉瓦の建物だけはそのままに残つてゐるが、驛前の廣場から丸ビルを盟主に、現代の城郭の様にそゝり立つ高層建築の堆積たる大ビルディング街。それを貫いて一路二重橋前の行幸道路に向ふ幅員七十三メートル帝都第一



飛行機から見た東京驛

盟主

Building.

Taxi.

Side-car.

Stop.  
のgo.

と言はれる大通を、眞黒に埋めた自動車の大群を見よ。歐米最新の流行型から、發達の歴史に遡る様な様々の車體をそろへた高級自乗車と均一タクシ。驛を起點に市の四境に向つて放射線狀に走る乗合自動車。これを飛行機上千メートルの上空から俯瞰したら、食を求めて走り廻る地上の蟻の群としか見えないであらう。帝都に於ける自動車の數は年々に多く、やがて三萬臺をも超えるといふ。それが市中到る所の街路上に行人を走らせ、電車と相追ひ、自轉車、サイドカーはその間を燕の如く、隼の如く飛廻るのである。多くの停留場には安全地帯が設けられ、交叉點には交通整理の巡査と信號手とがゴー、ストップの信號を與へて、交通の安全を圖



つてゐるが、しかし、危害を少くし、且いやが上に速度を高め

たい要求から地下鐵道の計畫も樹  
てられ、既に淺草、萬世橋間に、その一  
部が實現されてゐる。

昭  
和  
通  
斯様な交通機關の萬能時代に對  
して、橋梁と共に道路が帝都復興の  
眼目となつたのも不思議はない。市  
を南北に貫く幅員三十三メートル  
から四十四メートルの幹線道路、東  
西に走る二十七メートル乃至三十  
六メートルの幹線道路すべて五十二線、これを幹として四



(Asphalt)  
(土瀝青)  
舗装

方に百線以上の夥しい補助線街路を分枝する。その多くが  
アスファルトやヤコンクリートで舗装されてゐるから、雨が  
降つても泥濘に悩まされる事がなく、綺麗に洗ひ清められ  
た舗道から舗道へ、殆ど土を踏まずに歩く事も出来る。

### 二五 新しい都市 その二

三

普通選挙法

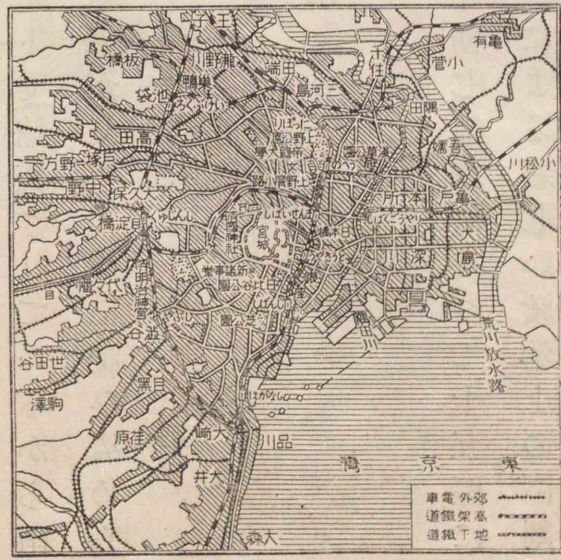
新しい東京はやはり舊と同じ地域によつて十五區に分  
けられてゐるが、普通選挙法による新しい政治上の區劃と  
しては、これを大きく四選挙區に分けて、麴町、芝、麻布、赤坂、四  
谷、牛込を第一區に、神田、本郷、小石川、下谷を第二區に、日本橋

傳統 環境

京橋、淺草を第三區に、本所、深川を第四區に當ててゐる。この四區には各その地勢と傳統とによつてそれとの異なつた環境があり、都市計畫も略これによつて立てられる。

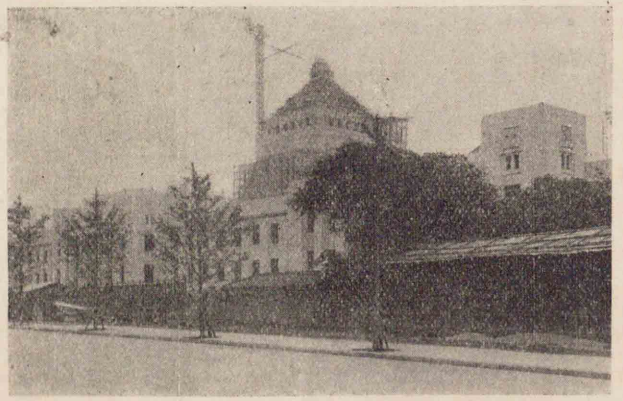
第一區。其所には言ふまでもなく宮城を中心として赤坂離宮、青山御所、高松宮邸がある。永田町の高臺に復興帝都の記念柱の様

(一) 舊高輪御所。



東京市略圖

鎮護

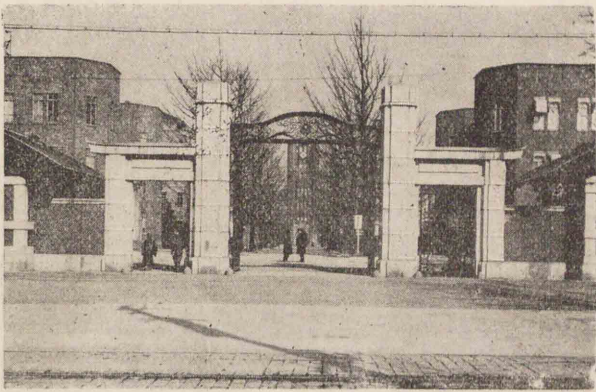


新貴衆兩院

ては内務、外務、大藏以下の諸省、警視廳以下の諸官署が此所に集つて、古王朝の盛世、大内裏の八省百官の威嚴をそのままに、帝國行政の中樞區を此所に形作る計畫になつてゐる。諸外國の大公使館が多く、參謀本部を始め近衛、第一兩師團の司令部もあり、外交、軍務の中心とも考へられる。神域の一部をこの區にもつ明治神宮は、九段坂上に世界一の大鳥居を誇る靖國神社と相對して、帝國の鎮護と仰がれてゐる。總稱して山の手といはれ、

最も震害を受ける事の少かつた静かな邸宅地として、舊態を保つてゐる。

第一區の官廳區に對して本郷の帝國大學、神田の經濟、法律の諸大學、醫學や語學の諸學校、小石川の文理科大學、日本女子大學校と植物園、更に下谷の上野公園に帝室博物館、東京科學博物館、帝國圖書館、帝國學士院を有し、美術、音樂の兩校と共に、春秋二季美術季節の中心たる東京府



東京帝國大學

美術館を抱擁する第二區は、神田の大書店街、それをめぐる

夥しい學生の群を加へて、學藝區らしい環境を作つてゐる。

第三區の日本橋通や銀座通が、帝都商業の大中心である事は今も變らないが、交通機關の發達と人口の移動とは、新宿、巢鴨とか、澁谷、大森とか、帝都の内外到る所に新しい銀座街を現出させ、將來の繁榮をこれと競はんとしてゐる。しかし、日本銀行を始め全國金融の中樞機關たる銀行會社の本據は殆ど此所に營まれ、



銀座通

兜町には東京株式取引所が、築地河岸には魚市場を盟主と

十指に餘る

尖端

呼應する

する中央卸賣市場があり、唯一の商業區として、帝都の富の半ば以上が此所に蓄積され、運轉されてゐる。その上、十指に餘る大百貨店は、店頭裝飾に華麗を競つて流行の尖端に立ち、木挽町、築地の大劇場街、淺草公園の大映畫館區と相呼應して、新しい都會の色彩を形づくる。

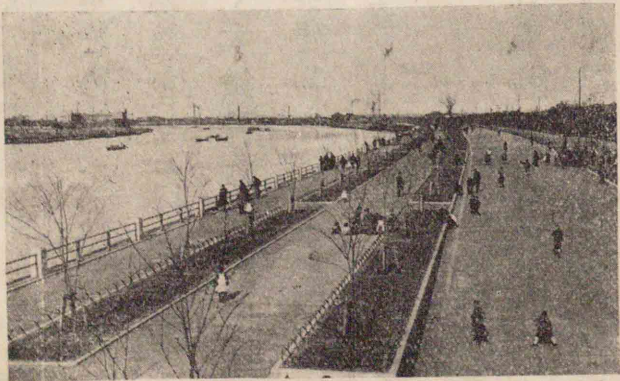
最後に、隅田川の流を隔てて對岸に工業區を營む第四區江東方面は、土地は低く人は多く、自然と生活との壓迫を受ける事の殊に甚だしい土地がらとして知られるが、今や狭陋な小路は縦横に擴げられて、坦々たる大道を通じ、樹木と光とに恵まれなかつた工場労働者の爲に富豪の庭園は開放され、遊歩用の臨川公園としての特色をもつ隅田公園も

Apartment  
house  
(貸室専門の  
大建築物)

聖地

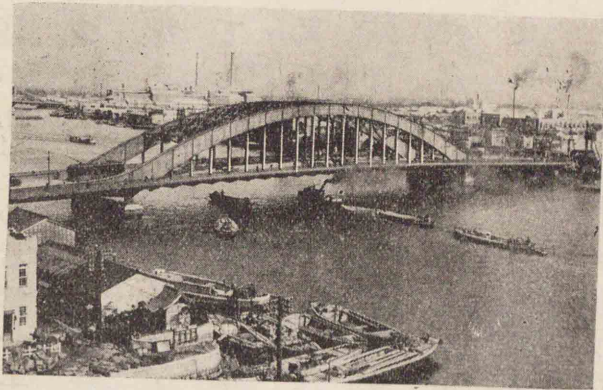
作られ、貧民の爲の近代的設備をもつ大アパートメントも築かれてゐる。嘗て六萬の生靈を葬つた本所の被服廠跡、年毎に新たな涙を加へるが、それも近く其所に建てられた大震災記念堂によつて淨められようとしてゐる。やがて増上寺や泉岳寺の様に新しい聖地として、多くの巡禮者を集める事になるであらう。

「復興は橋から」といふ標語の様に、財力と人工との最善を盡したと言はれる橋。その標本はこ



隅田公園

對映する



永代橋

の區と第三區とを繋ぐ隅田川の十二橋である。其所に一つとして同じ様式の者はなく、單純に明快に、空と水との間を劃つて、或は曲線を、或は弧線を、または直線をそれぞれに描く大鐵橋は、これが背景をなす工場の建物と對映して、新鮮な都市美觀をなしてゐる。

四

かうして作られた新しい都市は、自然に其所に住む人々の氣分をも、風俗をも變へる。今、街上を歩む男女の殆ど半ばは、軽い明る

Radio.

League.

雲集する  
(News)

年中行事

い色の洋装である。生活は簡易に、舉動は快捷が尙ばれる。街上に流れるラヂオや蓄音機の輕快な時代の行進曲は、路行く人の心を愈、軽くする。日比谷公園の市公會堂、明治神宮外苑の日本青年館、各新聞社の大講堂、さういふ所で毎日毎夜の様催される講演會や音樂會には、新しい科學工藝展覽會や美術展覽會と共に、何時も新しい學藝の香味を慕ふ男女の群が溢れてゐる。國技館の大相撲も今尙人氣は衰へないが、春秋二季の野球のリーグ戦に熱狂する市民や、街頭の速報臺に雲集して勝敗のニュースに一刻を争ふ人々の眞剣さには驚かれる。雛祭、花見、端午、潮干狩、川開、酉の市、さういふ江戸時代からの年中行事も、諸社の祭禮や、日蓮宗の會式と

同様に盛であるが、今は市やその他の公共團體の名でをりをり行はれる記念祭、記念週間などの方が、人心を刺戟し易い。歳末、新年の行事は昔のまゝであるが、それと共にまたクリスマスの催も或一部には年々行はれる様である。

五

新しい都市は、しかし、東京市の外郭を成す武藏野の中にも營まれる。

未來の大東京計畫は、東京驛を中心に半徑十マイルの大圓を描いて、圓弧の中に入る一切の町村を收めて總面積五百七十一萬平方キロメートル、現東京市の七倍以上の境域に、四百六十萬の人口を包容するといふ。これが完成される

肩を並べる

時、大東京の人口は、大ロンドン、大ニューヨークと肩を並べて、世界の第一位にのぼるであらう。これはまだ紙上の計畫に過ぎないが、實際には新しい都市が、この老大な外郭線の外にまで既にはみ出してゐて、東京は實に武藏野の到る所にある有様である。

Drive

上古草莽の面影を留めて、恐らく一たびも農夫のくのははいらなかつた奥武藏野の森林まで、今は縦横に拓かれて汽車、電車を通じ、自動車のドライブ(一)に任せてゐる。洋風住宅の赤屋根は農家の茅屋根の間に交つて、芋畑や大根畑の上に近代風景を點出し、稻の穂を吹く微な風は、五六里を隔てた大都會の雜音を運んでくる。

點出する

かうして都市と田園との距離は日を逐うて短縮される。東京市の内郭を環状に繞る省線電車、それと聯絡する二十に餘る郊外電車網、そのどれ一つによつても、三十分、おそくも四五十分で東京驛に達する。上野、池袋、新宿、品川——これ等帝都の門戸に當る大驛は、毎朝數萬時に十數萬の男女を武藏野の到る所から都心に向つて送りこみ、一日の勤務の後、晩に二たび野の家に送り返して休養させる。

(一)小説家。北海道の<sup>道</sup>人。明治十九年生。

自修文

若き人よ

(一)なかむら 中村武羅夫

青年の時代には、空想でも、元氣でも盛なものである。樹木なら

若木である。伸行く力は盛でも、その反面には大變脆い所がある。生活に鍛へられた、かかれてゐないのだから、止むを得ない。

私は青年の活氣を愛する。盛な空想力や元氣を好ましく思ふ者だ。だが、青年時代の活氣に任せて、周圍を顧慮したり、深い分別を廻らしたりしないで行動するのを見ると、危つかしい氣がせずにはゐられない。青年時代の特長は、元氣のある所にあるのだが、一方から考へると、それが一つの弱點になる場合もある。即ち元氣だけがあり餘つて、思慮の方の疎になる事である。

元氣があり餘つて思慮の方が足りないといふ事は、勢ひ無鐵砲になり易い。私は或場合には無鐵砲になる事も必要だと思ふ。即ち必ずしも無鐵砲を排斥はしない。なぜかと言へば、無鐵砲は冒險であり、自信であり、勇氣であるからだ。人跡未踏の地を探検したり、南極や北極に出掛けて行く事ばかりが冒險ではない。人

無鐵砲  
あとさきを見  
ずに行ふ  
こと。

若き人よ(自修文)

生行路の上にも、いろ／＼危険もあれば、艱難が横たはつてゐる。それを踏切り乗越えるには、やつぱり或意味に於ての冒險心が必要である。自信と勇氣とが必要である。冒險心がなく、勇氣と自信とがない人間は、大きな失敗もない代りには、大きな成功もないだらう。

が、青年時代の思慮の伴はない冒險心の爲に——無鐵砲な勇氣の爲に、その貴重な生涯を、取返しつかない失敗のどん底に沈めてしまつた人々も、どれくらゐ多い事か知れない。これは考へなければならぬ事である。大きな成功を収めようとする者には、大きな冒險心が必要であると同時に、深い思慮は更に更に必要である。南北の兩極地を窺めて、世界の巨人と謳はれたノールウエーの<sup>(一)</sup>アムンゼンが偉大な成功を収めたのは、唯單に勇氣と冒險心とだけの賜でない事を忘れてはならない。極地探檢の

(一) Amundsen  
(二) 諾威  
ノールウエーの探檢家。一八二〇年西  
紀一八二〇年一  
南極を九  
一八九二  
北極を九  
一八二〇  
行に北極  
一八二〇  
西紀一八  
二〇年一  
八二〇年

壯圖  
盛なくはだて。

様な花々しい壯圖に對して、人々は唯その華やかな勇氣や、勇ましい冒險心だけに耳目を奪はれてしまふかも知れない。だが、その裏には、人の目に立たない深い思慮と綿密な注意とが、どれくらゐ配られてゐるかも知れない事を、忘れてはならない。



アムンゼン

德川家康が天下を取つて、三百年太平の礎を築いたのも、唯勇氣だけではないのだ。天下を治め、德川十五代の世を續かせる爲には、どれだけ細心に内治

に心を配つたか知れないのだ。唯勇氣や冒險心の盛なだけでは、それは決して大きな成功を収める大きな器とは言はれないのだ。昔から、智勇兼備の大將でなくては、立派な大將とされてゐない。それは現代だつて同じ事だ。寧ろ昔から比べて見ると、現代の



もどかしい  
思ふ様になり  
ず心がいら  
らする。

一攫千金  
一度に多くの  
金銭をまうけ  
ること。  
Siberia.  
(西比利亞)  
Diamond.  
(金剛石)  
Platina.  
(白金)

社會は一層文化が進歩し、世の中が複雑になつて來てゐるだけにもつと綿密な思慮分別と、深い注意とが必要なものは、當然と言はなければならぬだらう。  
青年時代には、空想の力が盛なだけに、現實の遅々たるのがもどかしくてし方がない。學校に通つて勉強してゐる者は、毎日毎日、進みの鈍い勉強なんかこつ／＼やつて行くのが、ばか／＼しい様な氣がしてくる。勉強以外の仕事をしてゐる人間でも、自分の稼業がまだるつこく思はれてくる。何か一思に、思ひきつて花しい成功をする途はないかと、氣を焦らすにはゐられない。つまり一攫千金を夢みる心だ。

これは、私などにも覺えのある事だ。一步々歩いて行くのがめんだうくさくなつて、シベリヤに行つて大きなダイヤモンドでも拾ふとか、蒙古へ渡つてブラチナの塊でも見つけてくるとか——そんな事ばかり空想してゐた時代があつた。どんな所へ行くのにも、先づ足下の一步から始めなければならぬ事を忘れて、一足飛に成功の世界ばかりを夢みてゐるのである。一足飛に成功の世界を夢みるだけならまだいゝが、その爲に自分の現實を悲觀し、その日／＼の健實な努力が、ばか／＼しくなつてくるのは恐しい。

私は、青年時代の空想といふものは、元氣や勇氣を生出す原動力だから、盛な程いゝと思つてゐる。だが、むやみに空想の力に煽られて、それを引緊めて行く思慮分別が乏しいと、却つてその結果が恐しい事を警戒したいのだ。血氣にはやる青年時代の無分別から、取返しのかない身の破滅を來す様な場合が非常に多いのだ。世の中には、さういふ實例だつて随分多いと思ふ。それだからと言つて、餘り引込思案なのは、どうにもならない。

血氣  
げきしやす  
さかんな意氣  
はやりごころ  
引込思案  
勇氣のな  
りごみの  
かん  
がへ。

潑刺  
魚のをどりは  
ねる様。ここ  
では元氣な様  
をいふ。

因循姑息  
舊習により従  
つてぐづぐ  
すること。

青年にして進取の氣象に乏しいのは、多少は無分別でも、勇氣のあるのよりは、もつといけないだらうと思ふ。少しは無分別でも、勇氣と冒險心のある人間は、或は失敗するかも知れないが、大いに成功するかも知れないのだ。しかし、引込思案で進取の氣象に乏しいのは、失敗する事もないかも知れないが、成功する事もないだらう。それでは、青年の青年らしい特長がないではないか。青年は青年らしく、若々しく、潑刺として、元氣なのがよい。進取の氣象が盛で、二度や三度の失敗に閉口しないで、何度地べたにたたきつけられても、すぐ跳起きてまた進むといつた様なのがいい。青年のくせに、因循姑息いんじゆんこそくなのは、何よりもいけない。青年はよろしく青年らしくなくてはいけない。

青年は青年らしくかれ。

(一)小説家。名は源次郎。佐賀縣の人。明治十九年生。

(二)愛知縣 尾張國)名古屋市。

佛陀

(三)東京市下谷區。

二六 秋近く

吉田 絃二郎

今頃旅をすると、よく田圃の中に蓮の花を見る。いかにも蓮は夏らしいすがすがしい物である。(一)名古屋あたりには赤い蓮が多いが、關東には白い蓮が多い。ちよつと見には赤い蓮もいゝが、夏の夜明方に靜かに見る物としては、寧ろ白蓮を愛する。

しかし、何れにしても、蓮は誠に懐かしい花である。東方の國の花であるといふ感じが殊に強く身にしみる。

佛陀の國、夢の國、詩の國の花である。

以前まだ上野のあたりが、電車もなく家も疎であつた頃には、私たちは朝早く蓮の花の開く音を聴きにと言つて、出

(一) 東京府北豊島郡日暮里町にある。  
 (二) 同郡瀧野川町田端にある。この邊一帶は高臺となつてゐる。  
 (三) 源を關東山脈中の三國山脈に發し、秩父盆地を経て關東平野に出で、埼玉縣の中野を東南に流れて東京府に入曲り、彫りながら隅田川となつて東京灣に注ぐ。長さ一七七キロメートル。  
 (四) 東京府北豊島郡尾久町。  
 (五) 同日暮里町。共に東京市の北郊。

掛けたものであつた。  
 あの頃は、諏訪神社や道灌山あたりから東の方を眺めるとすつかり田圃で、荒川を上り下りする船の帆も、よく草の上に見えたものであつた。あの頃は尾久あたりから日暮里あたりにかけて、蓮の田が澤山あつた。青い田の間々に白い蓮の花を見出す心は、いかにも嬉しいものであつた。  
 十五六年も前までは、日暮里あたりを歩いてゐると、まだ昔のまゝの古風な家があつた。今でもまだともすれば、トタン屋根のバラック建の家の間などに、偶昔の蓮池の名残を見出す事などがあるが。  
 蓮はともかく、夏の朝の花として無上の物である。

(一) 東京市下谷區。  
 (二) 南千住町(北豊島郡)と千住町とを繋ぐ大橋。荒川に架る。  
 (三) 東京府南足立郡千住町。

(四) Humorous. (滑稽な)

小雨にぬれたのもよく、眞晝間の日の光を浴びてまどろんでゐるのもよい。  
 私は久しく根岸に住んでゐた。あの頃はよく千住大橋を渡つて、千住の市場の朝を見に行つたものである。色々な新鮮な野の物と一緒に、田から掘出されたばかりの新蓮根が、彼所の店にも此所の店にも、水を撒いた石だゝみの上に並べられてあつた。市場の空氣は蓮の香に包まれてゐた。  
 蓮の實も忘れ難い物である。  
 あのかしの實の様な、そして柔かな坊様の頭の様な一つ一つの顆は、ちよつとユーモラスな感じをいだかせる。  
 蓮の實がはぜる頃は、もう既に初秋である。

蓮の香を嗅げば秋の香を思ふ。

空高く路白い秋は、私たちの前に近づいて來てゐる。

○清淨無垢、餘りに寂しくも、餘りに尊くも思はれるのは蓮の花である。

恐らく花の中で尊いといふ感じをいだかせる物は蓮であらう。殊に白い蓮である。

雨の降る日など、子供の頃私たちはよく大きな傘をさして、蓮田のほとりに立ちつくしてゐた。

銀の様な雨があの廣い葉の上に落ちる。落ちては刹那刹那に嵩が増して行く。大きな水銀の様な露は、東に揺れ西に揺れる。雨が降り、嵩が増す。露は落ちてしまふ。一揺れ大きく

蓮の葉が揺れる。滴、また滴と、雨の小さな塊が更に露の嵩を増して行く。さういつた蓮の葉の上の雨を飽かずに眺めた時代もあつた。

蓮の葉の露を、七夕祭の朝早く起きて茶碗に掬んで來ては、色紙に歌を書いて、笹竹に結び附けたものである。

むくげも可憐な花である。寂しい花である。あはれと云言葉があてはまるであらう。



(筆郎徳多片) 華 蓮

(木槿)

秋の川沿の道に埃を浴びて咲いてゐるむくげを見れば、  
何となく見ぬ世の寂しさを思ふ。

愚案ずるに冥土もかくや秋の暮。芭蕉

むくげの花の、赤からず黒からず、いかにも寂しい姿を見  
ては、芭蕉の句を思ふ。

(一)「路ばたのむくげは馬に食はれけり。」  
(芭蕉)

馬に食はれる爲に咲出たのでもないのに、馬に食はれるか、頑童に折られるか、埃を浴びるか、籬のほとりに忘れられて咲くか。むくげの運命は秋の如く静かに、秋の如くわびしい。

芒の原こそ秋の日はわびしいものである。

萬頃の原悉く芒に掩はれて、風ある毎に北に靡き南に伏

す。

あはれは、芒の原にきはまる。  
鷹一つ芒の原を越えて山に入るのを見る。

朝顔を賣りにくる男の笠の上にも、秋の風が吹始めた。

草花を賣る少女等は、日にく武藏野の秋のたよりを都  
大路へ傳へてくる。

(一)歌人。名は繁宮崎縣の人。昭和三年歿。年四十四。

(蜀黍)

二七 秋風の音

若山牧水

いちはやく秋風のねを宿すぞと長き葉めでてもろこしは植う。

私はもろこしの葉が好きである。その實を取るのが望まらば、肥料は餘りやらぬ方がよい。しかし、見事な葉を見ようとならば、なるたけ多く施した方がよい。

書齋の窓に沿うた小さな畑に、私は毎年このもろこしを植ゑる。今年はそのあひ間く<sup>く</sup>にひまはりを植ゑて見た。兩方とも丈の高くなる植物で、一方はその葉が長く、一方はその花が大きい。

一年中さうではあるが、夏は別して私は朝が早い。大抵午前の三四時には窓をあけて椅子による。この頃だともう三時半には戶外が薄明るくなつてくる。そのさやかな東明の微光の中に、伸びるだけ伸盡したこの二つの植物が、一つは

(向日葵)

東明

黒ずんで見えるまでの青い葉を長々と垂れて立ち、一つは今朝にも咲出した様に鮮かな純黄色の大輪の花を大空に向



(筆峰春部阿) しころもうた

けて咲いてゐるのを見ると、全く眼の覺める様な思がするのである。窓からさした電燈の光で見ると、もろこしの葉の兩側には點々として露の玉が宿つて居り、尚よく見ると、その葉の眞中所に、ちよこなんと一疋の青蛙が坐つてゐる。不思議にこの葉には、このお客様が來てゐ

(蟋蟀)

るものである。  
じいつとそれらに見入つてみると、その畑の中からこほろぎの鳴く音が聞える。もうこの蟲が鳴き出したかと思つてゐると、遠くでは馬追蟲の澄んだ聲も聞える。  
夏の末、秋の初のかうした心持は、いかにも靜かで、わびしいものである。

(富士山の南麓、沼津市の北方、海拔一八七メートル)

愛鷹の嶺にわく雲をあした見つゆふべ見つ夏のをはりとおもふ。

明けがたの山の嶺に湧く眞白雲わびしきかな  
やとびくに湧く。

— 樹木とその葉 —

(俳人。名は清松山市の人。明治七年生)

素足

二八 蟲の音

高濱 虚子

闇の庭には唯蟲の聲が聞える。少し朽ちた竹縁に腰を掛けて、冷やかな沓脱石の上に素足をのせて、じつと闇の庭の面に向つてゐると、庭一面に蟲の聲がしてゐる様に思はれる。

「あれは松蟲の聲だらうか。」

「あれはこほろぎの聲だらうか。」

「あれはいとゞの聲だらうか。」

「あれはきりくすの聲だらうか。」

などと、一つ／＼に蟲の音を聞分けようとするのは、ちやうど綾錦の糸を、これは赤、これは青、これは金、これは緑と選分

ける様なものである。成程一つ一つの聲を聞分けようとすれば、松蟲、こほろぎ、いとゞきりくす、と區別はつくけれども、それ等の蟲の音は、何れも一枚の綾錦に織成された様に、唯全體が凜々と響いてくるのである。闇の夜であるから、確かにはわからないが、彼所にあるのであらう。一叢の草の根元から、また此所にあるのであらう。一叢の草の根元から、それ等の蟲の音は、涌立つ様に響いてくる。何千、何萬、何十萬といふ數を量る事の出来ない多くの蟲が、何れも互に負けまいと音を張上げるのであるから、可なり騒々しい。しかしながら、闇の涼しさといふ様なものがあるのなら、それは必ずこの蟲の音からくるのであらう。否、秋も半ば過であるから、

涼しさといふ感じは通り越して、うすら寒い感じである。闇のうすら寒さといふ様なものがあるのなら、それはきつとこの蟲の音から起るのであらう。

ふと聞くと、後の床の間の壁の所に當つても蟲の音がする。天井の方に當つても蟲の聲がする。床の下に當つても同様に蟲の聲が聞える。今まで庭ばかりと思つてゐたのは間違であつて、自分を取圍んで四方から蟲の音が聞えるのである。よくよく聴くと、聲高い一つの蟲が天井の隅の方で鳴き始める。さうすると、それに負けまいとして、同じ高音が床の下から聞える。今まで庭に鳴いてゐた蟲の聲の中にも、一際高いのが聞え始めて、天井や床の下の音に張合ふものゝ

張合ふ



様に見える。

じつと闇を見詰めてみると、それ等の蟲の音色が、闇の中に明らかに見える様な心持がする。蟲の音色が見えると言ふのは變な様ではあるが、「ちんちろりん」と鳴くその鳴聲は、いかにも透明な音色であつて、闇の中にその音色が明らかに見える様な心持がする。また「りんく」と鳴く蟲の音も、同じ様に透明な音色である。その音色は、明らかに「此所もとに」あるぞよ」といふ風に響く。すいつちよ、く」といふ蟲の音も、同じ透明な響である。その「すいつちよ、く」と鳴くのは、此所ですよ」といふ風に明らかに響く。が「ちや、く、く」と格段に強く騒がしく響くのは、蟲の中のおばれ者でもある様に、

他の蟲のかはいらしくもの哀げであるのと違つて、どことなくのさばり出る様を感じてであるが、しかし、そのうちに、また一種の哀さが見える。この大きいさばり出る蟲の音は、外の蟲の音から比べると格段に高く、此所に私が鳴いてゐ



高濱虚子筆蹟

相慕ふ村の  
灯二つ虫の  
聲  
虚子

錯綜する  
(箴)  
(縫)

ます」といふ風に、明らかに看取される。さうしてそれ等の諸音が、際立つて大きいことから、つぶくとした小さいのに至るまで、幾百千となく錯綜して響く。この音色のをさになり、綾になり、もつれ、ほどけ、巻返し、繰返しする様が、手に取る様

にはつきりと聞えてくる。それがちやうど闇に目があれば、眼前に明らかに見える様な感じを起させる。

沓脱石の上を足で探ると、鼻緒のとれかゝつた庭下駄がある。それをつゝかけて庭におり立つて見る。足音を立てて庭の道におりると、此方の叢の蟲は少し音を潜めるが、彼方の叢の蟲は平氣で鳴いてゐる。暫く其所にたゝずんでゐると、もう大丈夫だ。と心をゆるしたものゝ様に、すぐまた蟲の音は高まつてくる。また二三步歩くと、そのあたりの叢は少し潜み音になつて、五六歩、七八歩と歩くに連れて、同じ様な事を繰返す。もう最前の叢の所の蟲は、平氣で高音を張上げて鳴いてゐる。今音を潜めた蟲も、私の足音が行過ぎると、す

ぐ高音になつて鳴く。最前縁に腰掛けてゐる時分にも、尙床の間や、天井や、床下に鳴く蟲の音もあつて、恰も蟲の音の中にある様に覺えたが、今此所に來て庭の眞中に立つてみると、愈、蟲の音の直中にある様な心持がする。

この時、どことなくほの白くなつて來た事に氣がつく。もうそろゝと下弦の月の出る頃であるから、今月白が揚つた頃であらうと思ふ。さう言へば、草花に置いてゐる露の玉が、少しづゝ光つてくる様な氣持がする。今まで闇の中に唯黒く叢のある事を知つたばかりであつたが、それが萩の叢であり、紫苑の叢であり、薄の叢であり、桔梗の叢であり、をみなへしの叢である事が、漸くにしてわかりかける。萩の圓く

下弦の月

たゆたふ

枝垂れてゐる先が、地を摩つて暫く伸びて、ぴんとその尖のはねあがつてゐる様子などが、だん／＼と明らかになつてくる。秋風が来てその叢に吹當ると、暫くはたゆたふ様にしてゐるが、やがて二つに割れて、その風をじつとこの萩に支へてゐて、その風の力が弱ると、ざわ／＼と音がして、再び元の様に圓く枝垂れた形に戻る。こんな事もよく見える様になつてくる。やがて萩の花の紅い白いといふ事も、見分がつく様になつてくる。紫苑の丈高い莖の先に、一輪づゝ花をつけてゐる様子も明瞭になる。その紫苑の葉の莖の根元から伸びてゐる様が、夜目にも力强さうに見える。をみなへしの黄色くもの哀げに咲満ちてゐる様も見える。桔梗の花はと

たゝすまひ

り繕ふ術も知らぬものゝ様に、頑な人の如く規則正しくついでゐる。その有様も手に取る様に見える。

月はやがて我等の目に入るあたりまで昇つて來た。下弦の月と言つても、その弓は可なり引絞つた形である。空には一點の雲もないので、今は月光は隈なく庭の面を照す。先に闇の中にこの庭を見詰めた時の感じとすつかり違つて、今はもう庭のたゝすまひが、残らず目に入る様になつた。

ふと氣がついて見ると、やはり蟲の音は盛に聞えてゐるのであるが、どうしたものか、かく目に庭の景色を明らかに見る様になつてからは、その蟲の音は前程明らかに聞えない様な氣持がする。萩の叢を吹く風は、その後たび／＼同じ

(響)

様な姿を繰返すのであるが、その萩の叢の風に揺られる様  
が、明らかに見えれば見える程、蟲の鳴く音がおぼろげにな  
つて行く様な氣持がする。くつわ蟲は相變らず聲高く「がち  
や、がちや、く」と鳴きたてゝゐるが、それでも明るい月の下  
では、哀にか細い音に聞える。

私は再び竹縁に来て腰をおろして、庭の面を眺める。萩の  
叢や紫苑、桔梗をみなへしなどの叢には一面に露がおりて、  
きら／＼と光つてゐる様子が、手に取る様に見える。その露の  
一つ／＼に光る様は、ちやうど最前闇の中に蟲の音を聞いた  
時、その蟲の音が一つ／＼に透明な音色に見えた様に、そ  
の露の玉は、一々透明に揺動く。蟲の音の方は今はおぼろげ

になつて、最前の様な透明な光を見せる事は出来ないが、そ  
れとなり代つて、今は露の玉が一つ／＼に光つて、眼前の葉  
先に揺いてゐる。かの床の間や、天井や、床下に聞えてゐた蟲  
の音も、今はどうやら止んでしまつた様だ。月は少し破れた  
軒端から疊の上に光を落し、床の下をも明るく照してゐる。  
私は秋草に置く露の玉の風に揺ぐたびに、大きな塊にな  
つて、それが一つ／＼に光つてゐる光景に目をみはつて、再  
び蟲の音に耳を傾けた。

二九 太秦の牛祭

萩原井泉水

太秦の廣隆寺の前で電車からおりると、宏莊な山門の前

(一) 俳人。名は藤吉。東京市の年生。明治十七年。  
(二) 眞言宗。太秦寺ともいふ。推古天皇の二年(西暦六四五年)の創建で、山城の最古の寺。

(籬)

かげろふ

なだれこむ

には、大きなかぶり火を焚上げ、その穂先が赤くめらくと  
ゆらめいて、ちぎれて光を投げるので、金剛力士の像は、赫奕  
と照映えて動く様であり、高い梁や彫物などもかげろふで、  
殊にその朱塗の色がほんのりと浮いてゐる。高張提燈があ  
ちこちに掲げられ、青年團員が提燈を振つてゐる周囲を、群  
集は山門の中になだれこまうとしてゐる。今夜は古例の牛  
祭なので、私たちもそれを見に來たのである。

祭の儀式が始るのは夜更からだといふ事は聞いてゐた  
が、ともかく私たちも押されてはいつた。廣い境内には、縁日  
商人が露店を展げて、その店の間が自然に人の流れる路に  
なつてゐる。正面の大きな堂。これが名高い赤堂といふ講堂

しつらへる

であらうが、其所は暗い。左手にある金堂には幔幕を張りわ  
たし、電燈の光も明るい中に澤山の燭を列ね、且その前の廣  
場に齋壇をしつらへ、此所にもかぶりを焚いてゐる堂の上  
には、講員や來賓らしい人々が詰め、舞臺を遠卷にして、人立  
ちがしてゐる。祭文を讀むといふ儀式は、其所で行はれるに  
違ない。しかし、まだ餘程間があるといふ事を、此所でもまた  
聞いたので、一まはり散歩して來ようと、私たちは境内を奥  
の方へ行き、其所に松の間に路のついてゐるのをたよつて  
東の方へ足を向けた。その邊には、祭の群集はこぼれて居ら  
ず、別の所の様に靜かに蟲が鳴いてゐた。池がある。その  
水がかんがりと明るく、岸に立つてゐる松をくつきりと映

してゐる。

「あゝ、いゝ月だな」

私はその池水に映ずる月の美しさに驚いて、――今までとても、白い月が空にある事は感じてゐたのであるが、――ほつと打たれた様に首を舉げて、空を見た。松の枝にかゝるともなく月が浮いてゐる。今日は十四日である。私たちは寺の側門を出て、路が尙東の方へ續いてゐるまゝに、これは多分、花園の妙心寺に行く路であらうと思ひながら歩いた。空は何の遮る物もなく、大きく圓く、もう秋も深くなつた事を思はせる様に藍の色が黒ずんで、一ひらの雲さへもない。地平を見わたすと、まともに叡山がこんもりと据り、それに續

(一)京都市右京區、廣隆寺の東北。  
(二)臨濟宗妙心寺派の本山。延元(一九九六)の頃、花園法皇の御願により、關山國師の創立。  
(三)比叡山。京都市の東北方に聳えてゐる。海拔八四八メートル。

(一)京都市の東部を南北に走つてゐる山々。

(二)花園にある兼好の草庵のあつた所として名高い。

(三)姓は下部または吉田。鎌倉時代の文人。著者として知られる。名高。一〇五〇年(正平六年)八月に没す。

文人墨客

いて、東山がなだらかな曲線を連ねてゐる。その山の裾には薄い夜霧がたつて、京都の灯はその中に包まれてゐると見える。私は牛祭の事も忘れて、唯この路を何時までも歩いてゐたい様な氣がした。左手に近く、小さく茂つた岡がある。「これが雙が岡ぢやないかしら」  
兼好が徒然草を著したといふ所ですね。  
「さうだ。月は隈なきをのみ見るものかは。などと書いてゐたのだらう」  
私たちは小さい流に架けた橋を渡りながら、そんな事を話した。何しろこの邊は、昔から静閑の地として、徳川時代までも、文人墨客が小庵を構へる所にしてゐたらしい。その月

の路は、私たちの外に歩いてゐる者もないが、向ふから土地の人らしく子供など連れて、太秦の寺の方へ歩いてくる者もあつた。

「もうそろそろ始るのでせう。」

さう言はれて、私たちも引返す事にした。

一體、牛祭といふのは、摩吒羅神といふ靈鬼を祭る爲の式典なので、摩吒羅神に扮した僧が牛に乗り、赤鬼、青鬼の四天王を従へて齋壇に現れ、天下安穩、厄病退散等を祈誓する祭文を讀上げるものださうな。その時、群集が「も一つ、〜。」と叫んで、祭文を所望する習慣がある。それで

空暗し月やも一つ牛祭。

凡(一)董

(一) 江戸時代の俳人。芭蕉の門弟。加賀の金澤の人。俳句、残生不詳。

(一) 姓、高井、京都三土ル寛政元年(一三〇九)四月文政、世無村内弟

秋の秋

磯山ヤ小松の水

のも一つ」といふ言葉が出てゐる。また祭の終るのは夜半になるので、

油断して京へつれなし牛祭。

召(一)波

(一) 江戸時代の俳人。蕪村の高弟。姓は黒柳、春泥舎と號した。明和八年(一七六五)歿。

といふ句もあるなどと、私は問はれるまゝに話したりしながら、何時か寺の横手の路まで歸つた。

「あなた方、行列を御覽になるなら、此所で待つてお出でなさい。此所が一等いゝ場所です。もうぢきに御通りになりますよ……。」

土地の人らしいお婆さんが、私たちに聲をかけた。見れば、お寺の練屏の影が黒く伸びてゐる爲に氣が附かなかつたが、皆土地の人らしい五六人がしやがんで、祭の行

中天

列を待つてゐる様子である。で、私たちは其所に立止つて、さて所在なさにまたしたもしみと月を仰いだ。月はまさしく中天に位して、玲瓏と磨かれてゐる。かういふ夜は本當に、昔の人の事などが今の事の様に懐かしく想はれる。見物に來たらしい人が二人ばかり通る。さつきの婆さんが、私たちを呼止めたと同じ様にその人に教へたが、その人はさつさと境内の方へ行つてしまつた。

「中へ行つたら却つてよく見られないのに……」

婆さんは、路端の石に腰を掛けて、煙草をすぱりくと喫うてゐる。吹殻を土の上にはたいて、また煙管でそれを拾ふが、その小さい火の玉が、月光のべつたりと白く塗られた路

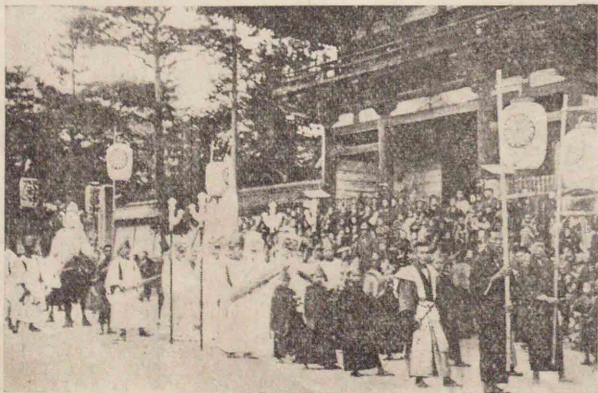
に、寶玉の様に赤い溝のへりに生えた短い雜草は、既に夜の更けた露を含んで、愈、青く月の輝きを受けて、小さな黒い影を引いてゐる。本當に明るい夜である。

「じゃらん、く……」

この時、その路のずつと遠くから、ねうはちを軽く打つ様な音が聞えて來た。高く捧げた提燈に、「摩吒羅神

五穀豊登」國家安全」と書いた文字が、幽に讀得るくらゐに、その行列は近づいて來た。私たちは腰をあげて立並んだが、婆さんはまだ

(鏡鉞)



秦の牛の祭



石にしやがんだまゝ、もう一服といふ風に、自分の煙管の赤い寶玉を愛翫してゐた。  
——京洛小品——

三〇 談義僧

柴田鳩翁<sup>(一)</sup>

<sup>(一)</sup>心學者。名は亭。京都の人。天保四年(一八三三年)歿。年五十七。

道歌

或人の道歌に、

あざみ草その身の針を知らずして

はなと思ひしけふの今まで。

よう考へてごらうじませ、長い物は長う見える。短い物は短う見える。お互に長みじかを見ちがへは致しませぬ。それ故、人の我を悪しく言ふのは、必ず見ちがへのない事ぢやと心得て、我が身を顧<sup>み</sup>るのが近路ぢや。これで思ひ出した話が

御座ります。

或山家より京の町へ談義僧を招待しに参りました。をり節その日は雨降で道も悪く、駕籠を持つて迎に來ました。和尚もやがて用意して駕籠にうち乗り、京を離れて四五里許と思ふ所で、どうした事か、駕籠の底が抜けました。いたはしや、和尚は袈裟も衣も泥まぶれになられた。迎の人足も氣の毒がり、其所ら駈廻つて、繩切多く拾つて來て、やうくくと駕籠をからげ、さて和尚に再び「お乗りなされ」と言ふ。和尚も氣味悪けれど、雨は強し、袈裟は汚れる、晝中に歩くも外聞悪く、不承々々駕籠に乗る時、これ駕籠の衆、もう底は抜けはすまいか、「いえ、く、氣づかひは御座りませぬ」と言ふ故、乗移ると

不承々々

(昇)

かき上げるとの拍手で、また底がめき〜いふ。和尚大きに肝を潰し、これではなか〜安心がならぬ。御苦勞ながら合羽の上から今一度、丈夫に繩がらみにして下され。と言はれる。人足も尤もに思ひ、また繩切を拾ひ集め、合羽の上を豎横十文字にからげ、これでは過は御座るまい。と、道を急いで或村を通り掛つた。

法談

勸化

無常迅速  
會者定離

をりふしこの村に法談があつたと見え、參詣の老若、道場の歸り足にこの駕籠を見つけて、肩衣を掛けたる親仁が、傍の媪に言ふには、何と皆の衆、今日の御勸化は有難い事では御座らぬか。いかさま無常迅速の世の中、生者必滅、會者定離のことわり、何時如來様のお迎があらうやら知れぬが人の

在所

身の上。あれ、あの駕籠を見さつしやれ。どうしても京へ奉公にいた人が死んだと見えて、死骸を在所へ連れていぬると見える。さてもはかないものぢや御座らぬか。と言ふ聲を、駕籠に乗りたる和尚聞きつけ、さては我を死人と心得たか。いまましい。と、わざと駕籠の中で咳拂すると、かの老人はこの咳拂に驚き、急に傍へ飛びのき、小聲になりて、死人ぢやと思ふたら、どうでも科人ぢやさうな。めつたに側へ寄るまいぞ。と言ふ。和尚愈、腹を立て、今はたまりかねて、駕籠の中でぢだんだ踏み、大聲あげて、科人ではおらない。と言ふ。その聲にまたびつくりして、さては科人ではなうて、どうしても氣違ぢやさうな。と言はれた。これが面白い話ぢや。何分駕籠を外から

合點

繩がらみにしたものの故誰に見せても死人ぢや。然るに中から物言へば科人と言ふもことわり、また「氣違ぢやさうな」と言ふのも、外からこじつけて言ふのではない。皆この方にその相、その模様があるによつてぢや。これでよう御合點をなされませ。善い者を悪いとは人は言はぬ。何事も身を省るのが肝心ぢや。或人の道歌に、

世の中は何もいはずに伊豫簾すだれ

その善惡よしあしは人に見えすく。 — 續鳩翁道話 —

國文 卷三 終

浦野製

昭和六年二月二十八日印刷  
昭和六年二月二十二日發行  
昭和六年十月九日訂正再版印刷  
昭和六年十月十二日訂正再版發行

國文 新制第一版 奧附

著者 富山房編輯部

版權所有



發行兼印刷者 富山房

代表者 同所合資會社富山房社長 坂本嘉治馬

印刷所 東京市小石川區音羽町七丁目六番地 富山房印刷部

定價 自卷一 至卷八 各金六拾錢 卷九・十 各金五拾九錢

發行所

東京市神田區 通神保町三番地

合資會社 富山房

電話神田一四四六一—一四四九番 振替口座東京五〇一—番

二學年二十學級  
所内信紙

才又

